はじめに

横浜市社会福祉協議会では、令和２年１月30日に「第５回よこはま地域福祉フォーラム」を開催しました。1,458名という多くの皆様にご参加いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

横浜市では、それぞれのまちの中で、普段の暮らしを支えるさまざまな活動が取り組まれてきました。その活動は少子・高齢化の進展をはじめとする社会状況の変化、社会的孤立や生活困窮等の課題に対応し、多様な形で展開されています。

また、普段の暮らしにおけるつながりは、近年、日本各地で発生している災害への対応にも資するものであり、そうした面からも、今後も本フォーラムの趣旨である身近な地域における支えあいを進めていくことが大切であると改めて感じています。

第５回目となる今回は、地域における助け合い活動が、まちの状況や解決すべき課題に応じて広がり、企業やNPOなど、さまざまな機関や団体の協力を得ながら、一層力強いものとして育まれている横浜の現在の姿をとらえ、開催テーマを「育まれる縁」として企画・実施いたしました。

本報告書は、よこはま地域福祉フォーラムの当日の様子をまとめたものです。

本報告書を通じて、より多くの皆様に取組事例が共有され、市内の各地域における活動の発展の一助になりますと幸いです。

令和２年３月

社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会

会長　大場　茂美

もくじ

●はじめに …… 1

●写真で見る“よこはま地域福祉フォーラム” …… 4

●基調講演 …… 8

ひとりぼっちにしないまちづくり
～地域で育む、子どもたちに寄り添う～
こどもソーシャルワークセンター 理事長　幸重（ゆきしげ）　忠孝（ただたか）氏

●分科会概要 …… 16

◆分科会１ …… 18

身近なまちで育まれる縁
～まちで寄り添い　支える暮らし～
コーディネーター　同志社大学　社会学部　社会福祉学科　教授　永田　祐氏

（1）困りごと引き受け隊／第３地区社会福祉協議会／麦田地域ケアプラザ【中区】
（2）横浜市南部学校教育事務所スクールソーシャルワーカー／磯子区こども家庭支援課／磯子区社会福祉協議会【磯子区】
（3）グループ男の手貸します／中屋敷地域ケアプラザ／瀬谷区社会福祉協議会【瀬谷区】

◆分科会２ …… 25

縁でつながるまちづくり

～つながりで芽吹く支えあい～

コーディネーター　横浜創英大学　こども教育学部　講師　**平野　友康氏**

（1）名瀬地区ハートプラン推進委員会・名瀬連合町内会／名瀬地域ケアプラザ
／戸塚区社会福祉協議会【戸塚区】

（2）スペース谷津坂／金沢東部地区社会福祉協議会／金沢区社会福祉協議会【金沢区】

（3）ＮＰＯ法人おもいやりカンパニー／中村地域ケアプラザ【南区】

写真で見る

よこはま地域福祉フォーラム

2020（令和2年）1月30日

受付開始
9：45

関内ホール外観

受付風景

開 会
10：15

大場会長の主催者挨拶

会 場

基調講演

10：30～
12：00

講師の幸重氏

NPO 法人こどもソーシャルワークセンター理事長
幸重忠孝氏による基調講演（→8～15ページ）

「ひとりぼっちにしないまちづくり
～地域で育む、子どもたちに寄り添う～」

休憩・移動

12：00～
13：15

総合案内

寄付受付

見える寄付コーナー

分科会 1

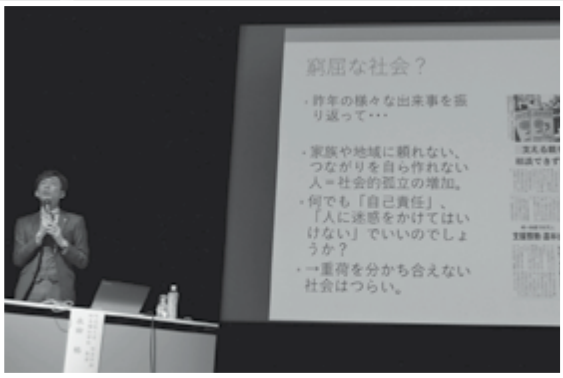
18～24ページ

身近なまちで育まれる縁 ～まちで寄り添い支える暮らし～

／関内ホール（大ホール）

13:15～15:30

コーディネーターの
永田先生



中　区

磯子区

瀬谷区

舞台裏の風景

スタッフミーティング

影マイク

分科会 2
25～32ページ

縁でつながるまちづくり ～つながりで芽吹く支えあい～

／関内ホール（小ホール）
13:15～15:30

コーディネーターの
平野先生

パネルディスカッション

名瀬地区

誘導係打合せ

舞台設営

基調講演

ひとりぼっちにしないまちづくり

―地域で育む、子どもたちに寄り添う―

NPO法人こどもソーシャルワークセンター理事長　幸重（ゆきしげ）　忠孝（ただたか）氏

児童養護施設から始まった

滋賀県の大津から来ました、幸重忠孝です。今日は「ひとりぼっちにしないまちづくり」ということで、お話をしたいと思います。

現在私は、地域の中での子どもたちの居場所づくりや、そういう活動をする人たちを応援する取組をしています。ではまず、地域の中での子どもの居場所づくりを始めた理由からお話ししたいと思います。

私が大学を出て、最初に就いた仕事は児童養護施設の職員でした。

今の日本は豊かな時代ですから、子どもは当然生まれた家庭で大きくなるだろうと思われています。しかし、実は割と多くの子どもたちが、自分の家ではないところで子ども時代を送っています。私が働いていたような児童養護施設や、里親が実親の代わりで子どもたちの面倒を見てくれているのです。こうした自分の家ではない場所で育つ子どもたちのことを、専門的には「社会的擁護が必要な子ども」と言い、日本では約４万5,000人います。

児童養護施設というと、私より少し上の世代は「タイガーマスク」という漫画やアニメに出てきた孤児院をイメージする人が多いようです。非常に貧しい生活を強いられていると思われがちですが、施設も里親も、国から必要な運営費が支払われています。ですから施設の子どもたちは必要なものは準備してもらい、３食おいしいご飯を食べ、お小遣いや習い事、部活で使う物等も買ってもらっています。確かに親とは離れて暮

らしていますが、生活は職員が日々関わっており、ある程度安定しているのです。

施設での悔しいスタート

しかし、私が児童養護施設で仕事をして、「足りない」と思ったことが２つあります。

１つ目は「愛情」です。これは決して、施設の職員が愛情をかけていないわけではありません。しかし、施設は児童福祉の法律に基づいて運営されていますので、職員１人につきこれだけの子どもを見てくださいという数が決められているのです。特に子どもたちが学校から帰ってくる放課後から夜の時間は、１人の職員が10人近い子どもと関わることになります。すると、「１人につき10分話を聞こう」と思っても、それだけで２時間使ってしまいます。そのため、施設の子どもたちは人にかまってもらう時間が少ないのです。

かといって、個人情報等の問題がありますから、地域の人に「施設にどんどん来てください」と言うわけ

にもいきません。結局、施設職員たちが四苦八苦している現実がありました。

もう１つは、施設を出た後のケアです。児童福祉の法律にのっとり、18歳までは施設で安定して暮らせます。しかし18歳を超えたら、施設を出ていかなければなりません。

施設を出て一人で生活を始めるには、住まいと仕事を確保する必要があります。しかし、身寄りのない子どもたちですから、部屋を借りるだけでも四苦八苦します。私が施設で働いていたころは、寮付きの仕事に押し込むような形で施設を出ていく子が多かったです。今もその傾向があると思います。それで仕事を頑張れたらいいのですが、施設を出て１年以内に仕事を辞める子どもたちがとても多いのです。

住まい付きの仕事を選んだ場合、仕事を辞めると住まいも失います。われわれ大人が付いていてもなかなか部屋を貸してもらえない現状で、彼らが仕事を辞めて寮を出されるときに住むところを見つけられるかといったら、見つけられません。その際に施設を頼ってくれたら手だてがあったのですが、ほぼすべての子どもたちは何も言わず、夜逃げのように黙って消息を絶ってしまいました。これは私が働いていた施設の話なので20年ほど前ですが、現状もあまり変わっていないと思います。「福祉が頑張るだけでは解決しない」と、悔しがることしかできないスタートでした。

スクールソーシャルワーカーに転身

私は児童養護施設を辞め、８年ほど大学の先生をした後、30代半ばでスクールソーシャルワーカーになりました。日本の学校は、20年ほど前からスクールカウンセラーという心の専門家が配置されるようになりました。その後、今から10年ほど前に国は、新たに福祉の専門家「ソーシャルワーカー」を学校に配置することにしたのです。私は「これだ」と思い、それ以降現在に至るまで、スクールソーシャルワーカーとして地域の小学校や中学校に関わっています。

学校には元気な子がたくさんいますが、私たちが関わるのは学校で気になっている子どもたちです。学校に来ない・行きにくい子や、いじめに苦しんでいる子、勉強に付いていけない子、授業中にうろうろしている子などです。中学生になると、ルールを守らない子、自分で自分の身体を傷つける子等も増えてきます。こうした先生が対応に困っている生徒に対して、福祉の専門家として一緒に関わっていくのが私の仕事です。

学校で働くようになって分かったのですが、学校ではできないことが２つありました。

１つは、放課後のケアです。気になる子どもたちが家に帰った後の夜の時間は、学校の先生やスタッフでは何もしてあげられません。家庭が大変な子だと先生が分かっていても、夜の時間はどうしようもないのです。休みの日も同じです。土曜日や日曜日、夏休みや冬休み等の長期休暇、家庭が大変な子どもたちは本当にしんどい状況にいます。

そこで私は、「地域の人たちの力が、しんどい子どもたちにうまくつながったら、この子たちは元気になるのではないか」と思い、10年ほど前から地域の中で厳しい家庭環境にいる子どもたちの居場所づくりに取り組むようになりました。

滋賀県大津市に、私が運営しているこどもソーシャルワークセンターがあります。一軒家を借りて、困難を抱える子どもたちに家庭的な居場所づくりを行っています。そこでは小学生から中学生、高校生、二十歳前後の若者たちが定期的に来ています。

ネグレクトという虐待

滋賀県では、県内の高校にソーシャルワーカーが出向いて、子どもを取り巻くいろいろな問題について知ってもらうための出張授業をしています。高校生たちに理解してもらうために、滋賀県のアニメ制作会社と協力をして、いろいろな困難を抱える子どもたちの話を５分程度のアニメーションにしています。今の若い子たちは、30分のテレビ番組を見ることが減っているそうです。みんなスマホの動画を見ているので、５分から10分ぐらいのテンポが一番合うのです。代表的な動画を、今日は３つご紹介します。

１つ目は「かまってくれない」というネグレクトを紹介するアニメです。ネグレクトとは保護者にきちんと面倒を見てもらえない虐待のことで、日本中の家庭にたくさんあります。

登場人物は中学生の兄、小学生の弟、それに母親の

3人家族です。父親はいない、母子家庭です。日本の母子家庭のほとんどは母親が働いていますが、母子家庭は収入の高い仕事になかなか就きにくく、平均年収は200万円程度です。少しでも収入を得るために、お昼働いた後もう一回夜働きに行ったり、収入のある夜の仕事を狙って働くこともあります。

動画に登場する主なエピソードは「お風呂に入れてもらえない」「朝ごはんがない」「病気になっても親が返って来られず、家で放置される」などです。

児童相談所に連絡しても、もし置いていかれているのが赤ちゃんなら命に関わるので保護しますが、小学生や中学生の子どもが毎日夜を子どもだけで過ごしていても、命には関わりませんから保護するレベルではありません。

こういう家庭の夕飯は、帰ったら机の上に1,000円が置いてあって「晩ご飯と朝ご飯、自分で買って食べておいて」ということが多いようです。「親につくってもらったご飯を食べたことがない」という子どもたちが、日本にはたくさんいます。

親が夜働きに行くしかないという現状の中、子どもたちが病気になることもあります。大概小学生ぐらいまでは医療費補助がありますが、完全無料から１回500円等安く設定しているところまで、自治体によってさまざまです。お金に困っている家庭は、１回500円の捻出が大変だったりします。

また、医療費を無料にするだけでは子どもは医療につながれません。特に小さい子は、誰かが病院に連れて行かなければ病院にかかれないのです。親に愛情があっても、忙しくて仕事を抜けられなかったり、仕事を抜けたらその分収入も減ってしまうので、「病院に行かなくても寝てたら治る」ということになるわけです。

家で掃除や洗濯をする暇もないので、子どもたちは不潔な格好で学校に行くしかない。そうすると学校の中では、やはり「汚い」などと言われるわけです。こうしたネグレクトは、地域でもアンテナを張ったら比較的発見しやすい困難です。

心理的虐待

実は外から見たら立派な家に住んで、立派な親の下にいる子どもたちが、家の中で苦しんでいるという家庭も少なくありません。これが２つ目のアニメ「もうひとつの顔」のテーマです。

このアニメの登場人物は父親、母親、息子で、父親が日常的に母親を虐待しています。それを毎日目の前で見ている子どもは、とても傷ついています。これは「心理的虐待」といって、子どもたちの身体ではなく、心を傷つけるタイプの虐待が今とても増えています。子ども本人ではなくDVや、モラルハラスメントと呼ばれる虐待も含まれます。

心理的虐待は、なかなか周囲は気が付きません。こういう家庭の親は愛想がよく、近所付き合いもよくやっていることが多いため、一見、しっかりしているように見えるのです。それでも子どもの心は深く傷ついています。

心理的虐待が増えてきた背景には、警察の介入があります。以前は、警察があまり家庭のことに介入しませんでした。しかし今は、ちょっとしたことでも近所の人や本人が警察を呼んだら、すぐ駆けつけます。行った先に子どもがいたら、「子どもが傷ついている」ということですぐに児童相談所に連絡するので、心理的虐待が発見できるようになってきたのです。

スクールソーシャルワーカーは学校でいじめがあると、被害者のサポートをするのは当然ですが、加害児童もケアします。よく調べてみると、学校ではいじめをしているけれども、家庭では心の虐待を受けていることがよくあります。その苦しみ、ストレスを学校で発散しているわけです。しかも家の中で「どうやったら人の心が傷つくのか」をよく見ているので、非常に巧妙な心理的いじめをしていたというケースに出会うことがよくあります。

過剰な期待も虐待になる

最後は、「頑張っても頑張っても」というアニメです。これは、周りの大人が子どもに対して期待するあまり傷つけてしまうタイプの虐待です。

親は子どもに、「少しでも勉強を頑張って、いい学校に行って、いい仕事に就いてほしい」とか「野球で甲子園に行ってほしい」など、大きな期待を抱くことがあります。夢や願いを持つ程度ならいいのですが、それが度を過ぎると子どもはしんどくなっていきます。

親の期待に応えようと思って頑張りますが、頑張れない時期が来たとき、大体思春期でぽきっと心が折れてしまいます。「頑張っても頑張っても」はそんな女の子が出てくるアニメです。

ある地域の子ども食堂の手伝いに行ったら、そこに来ている子が、「僕は毎週この子ども食堂を楽しみにしている」と言っていました。話を聞いたら「この日以外は毎日習い事等があってしんどい。でもここに来たらみんなと一緒にご飯を食べて、おしゃべりができて、この日だけが僕の癒やしだ」と言いました。一見幸せそうに見えても、子どもたちは期待に追い立てられる中で、頑張り続けて苦しくなってしまうことがあります。そして心が折れたとき、リストカットなどで自分の身体を傷つけたり、拒食症や過食症等の摂食障害、家庭内暴力の原因になるとも言われています。

トワイライトステイ

ここからは、私が携わってきた子どもたちの居場所づくりについてお伝えします。

私が特に感じていたのが、夜の５時から９時に地域で温かい居場所を提供してあげたいということです。放課後から親が帰宅するまでのこの時間が、行政のいろいろな仕組が入らない時間帯だからです。ここに地域のお兄さん・お姉さん、おじさん・おばさんたちの力を借りてほっとできる場所をつくりたいと考え、「トワイライトステイ」や「フリースペース」と呼ばれる取組を始めました。

まずは、子どもの夜の居場所づくりを京都で始めました。商店街の空き店舗を使って、地域のお兄さん・お姉さんたちと夜の５時から９時までの時間を過ごす場所をつくったのです。夜の時間ですから、「みんなで食べるご飯の時間」と「近所の銭湯に行く時間」を取りました。それ以外の時間は、家で過ごすようにごろごろだらだら過ごしてもらっています。別に学童保育所や施設ではありませんので、家で過ごすように自分のペースでゆっくり過ごしてもらっています。

ポイントは、たくさんの子どもは集めないことです。子どもの数は一度に２～３人にして、週に１回ずつ来てもらっています。月曜日の子、火曜日の子と順番に来るのですが、なぜ２～３人の子どもかというと、一般的な家庭の子どもの人数に合わせているからです。施設では１人の職員が10人ぐらいの子どもを見ていますが、ここでは地域の人の力を借りながら、絶対に子どもの数より大人の数を多めに置いています。２～３人の子どもに対して地域のボランティアさんが同じく２～３人、そこに職員が入って、全体で７～８人ぐらいの小さな規模で夜の時間を過ごします。

京都は頑張ってくれている若手に任せて、私は今、滋賀県で空き家を借りて居場所づくりを行っています。滋賀県でも同じく、夜の５時から９時まで週に１回、ほっとできる居場所をつくっています。こちらでも、大したことはしていません。子どもたちがだらだら過ごして、ご飯を食べて、お風呂に行っているだけです。貧困や虐待、ネグレクト状態にある子どもたちに利用してもらっているのですが、子どもたちの家庭生活で欠けているものは「当たり前の生活」です。ですから、そこで提供する「当たり前」は、地域の当たり前の人がやってくれたほうがいいと考えています。

フリースペース

滋賀県ではもう一つ、「フリースペース」といわれる面白い仕組みで夜の居場所づくりをしています。

こういう活動をするには、夜の居場所にする場所が必要です。京都では商店街の空き店舗を使い、うちのセンターは空き家を改装したところを使っています。農業を引退したご家庭の、農機具倉庫を改装して居場所をつくっているところもあります。

滋賀県では、老人ホームに目を付けました。高齢者の施設の多くは、デイサービス事業をやっています。朝、各家庭に迎えに行って、デイサービスセンターでおじいちゃん・おばあちゃんたちが過ごして、夕方には各家庭に帰ります。子どもの居場所づくり活動は夕方５時からなので、デイサービスのエリアを借りたのです。夕方になると駐車場もがらがらで、外で遊ぶこともできます。エントランスも広いのですが、夜の７～８時になると、職員が少し通るだけです。子どもたちは、ここで元気にキャッチボールをしています。普段何も話さない子が、キャッチボールをしているとき「家で今こんなことになっている」「私はこんなことがつらい」という話をしてくれることもあります。

こういった施設はご飯も施設の中でつくっていますから、「ボランティアと子どもで８食分お願いします」と言ったら出してくれます。銭湯へ行かなくても大きなお風呂がありますから、貸してくれます。送迎車も施設が持っているので、ちょっと調整して子どもたちを送ってくれます。こうした施設と協働するスタイルのフリースペースが、滋賀県内で広がっています。

子どもたちを誘うポイント

夜の居場所づくりは「ターゲット型」と言って、支援が必要な子どもたちをピンポイントでつないでいく支援スタイルです。こういった子どもたちは、どうやってここに来るのでしょうか。我々が受け入れられる人数は週に１回、２～３人ずつですから、たくさんの子どもは募集できません。そこで、学校にいるスクールソーシャルワーカーに対して「○○の地域でトワイライトステイという、週に１回子どもたちが夜を過ごす活動が始まった」と連絡を入れます。スクールソーシャルワーカーは小学校や中学校でしんどい家庭のことを把握していますし、福祉関係の機関ともつながっていますから、トワイライトステイを必要とする子どもを選んでもらいます。

ただ、こういう場所がありますと言ってもすぐには来ませんから、ちょっとした仕掛けが必要です。まずは学校の先生やスクールソーシャルワーカーなど、よく知っている人が「地域にこういう夜の居場所ができて、地域の大学生とかが子どもたちの勉強を見てくれるんだ」と説明に行きます。最初は絶対「行かない」と言われるので、「見学に行こう」と誘います。見学には、必ずその親や子どもたちと関係ができている学校の先生やスクールソーシャルワーカー、家庭児童相談室、生活保護のワーカー等、よく知っている福祉関係の人が一緒に来ます。

ここで裏技があります。見学に来るときに、必ず事前によく知っている人から情報を入れます。この情報は、「母子家庭です」とか「ちょっと障害があります」とかではありません。「この子は何が好きなのか」がポイントです。「ゲームが好き」とひとことで言っても、ゲーム機にも種類があります。スマホのゲームと任天堂のゲーム機は似ているようでまったく違います。しかもゲーム機ならその中の「何のゲーム」を好きかが知りたいのです。「サッカーが好きで、○○のチームのファンだ」「アイドルグループ○○が好きだ」等、事前にその子が好きなことを知っておきます。

好きな食べ物も聞いておきます。「カレーライスが好き」「ハンバーグが好き」とわかったら、見学に来たときはそのメニューを出し、その子が好きなことができるようにしておきます。アイドルの○○が好きだと聞いたら、そのアイドルのコンサートに頻繁に行っている大学生のボランティアの子に来てもらいます。そうしたら当たり前ですけど、絶対に楽しいのです。「来週も来る？」と聞くと、100％「来る」と言います。そこでわれわれが、「来週からは私たちが迎えに行くよ」となるわけです。

家庭にもいきなり「すいません、契約書にサインを」と言ったら引きますから、１カ月間はお試し期間にします。「とりあえず１カ月間お試しして、途中で嫌だったらやめてもいいですよ」と言います。１カ月間も通えばわれわれのこともわかるし、子どもが楽しそうにしている場所に親も行くなとは言いません。親自身も子どもとちょっと離れる、それだけでほっとできるんだということを知ります。１カ月経って、初めて「一応利用契約があるんです」と言って、細かいことを説明します。主な内容は「関係機関で情報を共有します」「いろいろなお客さんが来ます」「写真の撮影は顔が写らないようにですが撮ります」等をそこで了解を得て利用するのです。滋賀県ではそういう仕組を、スクールソーシャルワーカーや社会福祉協議会と協働しながらつくっているのがポイントかなと思っています。

誰もが来られる居場所づくり

問題は、苦しんでいる子どもたちの多くは、外から見ているだけではわからないことです。ですから、

困っている特定の子のための居場所づくりも大事ですが、誰でも来られる地域の居場所づくりも同時に行わないといけません。子どもたちは自分で歩いて行ける距離にしか行けませんので、徒歩圏内に居場所づくりをしようという取組が「子ども食堂」や「寺子屋」です。

子ども食堂は近年有名になってきましたが、学校が休みで行き場がない子を対象として、休日を中心に活動をお願いしています。地域の実情に合わせて毎週、毎月、夏休みや冬休みだけ等、開催頻度には差がありますが、それでもいいと思います。滋賀県では「子どもが歩いて来られる場所」ということで、小学校・中学校の数と同じぐらい居場所をつくりましょうと、県を挙げて取り組んでいます。

その他にも、町の中にはいろいろなお店があります。この人たちと手を組むと、しんどい子どもたちをより多角的に支えることができます。いくつかご紹介しましょう。

美容師・理容師との取組

１つ目は理容師・美容師と一緒にやっているハピハピカット（HappyHappyCut）という取組です。

うちのセンターに来ている子どもたちはネグレクトや貧困状態の子どもたち、引きこもりの子が多いので、身なりが気になります。そこで、地域の理容師・美容師と協力して、髪を切ってあげる活動をしているのです。

例えば髪の毛を１年近く切っていなくて、ぼさぼさで、ご飯を食べているといつもみそ汁に髪が入ってしまう子がいました。こういう子どもの髪を美容室に行って切ってもらうのです。プロの美容師の手に掛かれば、さらさらのかわいい髪になります。翌日学校へ行ったら、おそらく「髪切ったの？　かわいいね」と言ってもらえるはずです。髪を切ったり、気に入った服を買ってもらえる子たちは、本人が頑張らなくてもみんなから「いいね」「かわいいね」と言ってもらえる機会があります。一方、親が美容室に連れて行けなかったり、服を買いに行けない家庭は、そういうことを言ってもらう機会がありません。この子も髪を切った後、自信を持って、さらさらな髪をずっと触っていました。

男の子にもこの活動は有効です。おしゃれ長髪ではなく、切らないためにぼさぼさに伸びた男子の髪を切ってもらったら、さっぱりしてかっこよくなり、それまで落ち続けていたバイトの面接に受かったのです。

子どもたちは、髪の毛を切ってもらうだけではなく、チャリティーグッズをつくってもらっています。絵を描いたり、封入のお手伝いをすると、カット券をもらえる仕組みです。お店もタダでやっているのではなく、チャリティーグッズの売り上げでセンターからカット料を払っています。だから、子どもたちをきちんとお客さんとして扱うわけです。こういう仕組みが大事です。いつもレジのところにチャリティーグッズが置いてあり、バッジを買ってくれるお客さんがいて、そういうお客さんの温かい気持ちが子どもたちの理美容につながっていく。こういう循環を生みだしているのがハピハピカットというプログラムなのです。

お寿司屋さんとの取組

町に個人営業でやっているお寿司屋さんがあります。ここの大将自身も幼い頃に大変な暮らしをしていたそうで、「テレビや新聞で、子どもの貧困があると聞いて、子どもたちに本物の寿司を握ってやりたい」と考えていたそうです。

その話を偶然聞いて、このお寿司屋さんに連絡をとり、「今、市内ではトワイライトステイやフリースペースで居場所づくりをやっているから、この子たちを招待して子ども食堂をやってほしい」とお願いして、「すしっこクラブ」が誕生しました。

これもハピハピカットと一緒で、続くための仕掛けが必要です。すしっこクラブでは、「すしっこクラブ応援メニュー」という手巻き寿司をつくって販売しています。市役所や社協、地域の集まりのときに、事前注文制で販売します。値段もリーズナブルで、コンビニと変わらない程度の値段で、このお寿司屋さんの絶品手巻き寿司が食べられます。しかもお昼に、職場まで持ってきてくれるのです。すしっこクラブ応援メニューの日はたくさんつくるので、うちで引きこもっている若者たちがここでアルバイトをさせてもらえる機会にもなっています。

2019年３月は「月に200本売れたら10人の子どもたちにお寿司を振る舞います。300本だったら15人。

400本売れたら、すしっこクラブ以外にも何か冬休みや夏休みに面白いことができるかな」と言っていたのですが、去年の段階で既に400本を超えました。今年はなんと月に1,015本も注文が来るようになり、いろいろな活動も応援するようになっています。そういうハッピーの循環が起こっています。

企業による応援

先ほどのアニメーションをつくってくれた会社が、一緒にアニメをつくっていく過程で、「自分たちも何かしたい」と思い始めました。そこで始めたのが「野洲のおっさんおにぎり食堂」です。おにぎり屋さんをつくって、その収益で子ども食堂をするという仕組みです。

また、企業が応援するというのは、直接的に応援するだけではありません。民間で居場所づくりをしようと思うと、どうしても資金が必要です。その資金面を応援する仕組みとして、京都にあるファッションブランドと一緒に取り組んだプロジェクトを最後に紹介したいと思います。

JAMMIN（ジャミン）というファッションブランドが京都にあるのですが、こちらの企業がNPOと一緒にコラボしている取組です。これが、われわれNPO側の負担がなく、素晴らしい仕組みなのです。うちは役員の私と、職員１人と、バイトの３人のみでやっている小さなNPOです。資金集めのために寄付を募ったり、いろいろな物をつくったりしたいのですが、その余裕がありません。そこでこの企業がうちに取材に来て、「こういうNPOの活動です」と紹介する記事をつくってくれます。さらにこの企業のプロデザイナーが、うちの団体をイメージしたものを基にデザインしたすてきな衣服をつくり、宣伝し、販売をしてくれるのです。われわれも「ファッションブランドがつくってくれたので、買って、着て、応援してください」と協力をお願いしています。

居場所づくりは無意味だという声

これまでご紹介したように、いろいろな困難を抱えた子どもたちがいますが、地域の力をうまくつなぎ合わせたら、そういう子どもたちがほっとできる時間や場所をつくり出せると考えています。

しかし、居場所づくりに取り組んでいると、時に「居場所づくりはいいと思うけれど、週に１回程度やっても本当にしんどい子どもたちが何とかなるのか」という意見が寄せられます。

この意見は、地域の居場所について大きな誤解をしていると思います。最後にその答えを子どもたちの声が導き出してくれているので、子どもの作文を読んで今日の講演のまとめにさせてください。

カズキ君という、今は施設で暮らしている16歳の男の子が、自分が小学生のときのことを思い出して書いた作文です。

カズキ君の作文

「はだしで駆け出し逃げた、そして」

僕が家を飛び出したのは小学２年。僕は母と二人で１部屋しかないアパートに住んでいた。

母は毎日僕に暴力を振るっていた。宿題をやっていない、手伝いをしない、言うことを聞かない、いろんな理由で僕を殴ったり蹴ったりした。僕が悪いことをしたときはいいんだと思った。殴られても僕が悪いんだから仕方ないと思えた。でも僕が学校で体育のドッジボールですごく頑張ったことを話したくて、仕事から帰ってきたお母さんに「ねえ、お母さん」って話し掛けたとき、いきなり「うるせえ、疲れてんだよ、空気読めよ」と金切り声で怒鳴られ、近くにあったマグカップを投げ付けられたときは混乱した。今悪いことした？　お母さんを怒らせるようなことをしたのかなと考えた。でもすぐに考えるのをやめた。僕が悪いんだと思ったほうが悩まなくて苦しまなくていいと思ったから。暴力を振るわれたときは、「僕が悪い」を呪文のように唱えた。呪文を唱えると、不思議と痛みはあまり感じなかった。「僕が悪いよ、お母さん、ごめんなさい。お母さんが殴ったりしなくていい、いい子になります」。そう思って願って毎日を暮らした。

僕の小学校の通学路に小さな豆腐屋さんがあった。その豆腐屋のおじさんはいつも僕たちが帰るころに店の前に出て、「お帰り、気を付けて帰れよ」って声を掛けてくれていた。友達はいつもおじさんと楽しそうに話したり、手を振ったりしていたけど、僕は一度も

おじさんと話したことはなかった。ある日僕が一人で帰っていると、おじさんがいつものように店の前に出ていた。「お帰りなさい」って笑顔で言われた。僕は誰かに「お帰りなさい」と言われたことは初めてだと思った。そして名前を聞かれた。「カズキ君、気を付けて帰るんだよ」。その日からおじさんは僕を名前で呼んだ。僕は大人に優しく名前を呼ばれたのは初めてだった。僕は幼稚園も保育園も行ってなかったし、おじいちゃんもおばあちゃんも親戚もいない。僕を「カズキ君」なんて呼ぶ大人はいない。お母さんは僕のことを名前で呼ばない。「おまえ」、「おい」としか呼ばない。だから名前を呼ばれて胸がどきどきした。何だか分からないけど涙が出そうになった。それから時々おじさんと話すようになった。

ある日、おじさんのお店の椅子に座ってアイスクリームを食べていたら、おじさんがそっと僕の腕に触れて言った。「痛いか？」。僕は一瞬びっくりした。僕の体や顔にできた傷のことで何かを言われたことは初めてだったから。僕の腕にはお母さんにたたかれたあざと、たばこの火を押し付けられた根性焼きの痕があった。「痛いか？」ってあまりに普通におじさんが言ってくるから、僕はうなずいた。そしてすぐに、何も聞かれてないのに、「僕が悪いことしたからだよ」と僕は言っていた。おじさんはいつもの優しい目で僕を見て、はっきりと、「カズキ君は悪くないよ」と言った。おじさんは誰がやったとか、どうしてやられたとか、何も聞かなかった。それからもお母さんが僕に暴力を振るったり、物を投げたり、お風呂の冷たい水を掛けたりは続いていた。

おじさんに「カズキ君は悪くないよ」と言われてから、僕の呪文は効き目がなくなってしまった。呪文の代わりに、「お母さん、なんで僕にこんな痛いことをするの？」「なんで僕を名前で呼んでくれないの？」「お母さん、やめて」そんな言葉が頭の中をぐるぐるした。以前は感じなかった痛みを感じるようになった。体も心も痛くて痛くてちぎれてしまいそうだった。

そしてあの日のこと。僕はお母さんと夜ご飯のカップラーメンを食べていた。音を立てないように緊張しながらラーメンをすすっていたとき、ラーメンをこぼしてしまった。お母さんは、「ラーメンぐらいまともに食えねえのか」って怒鳴って、水の入ったコップを僕に投げ付けた。そして僕の胸ぐらをつかんで思いっ切りたたき始めた。そのときおじさんの顔が浮かんで、声が聞こえた。「カズキ君」と僕を呼ぶおじさんの優しい声。僕は「お母さん、やめて」って叫んで、はだしで家を飛び出した。おじさんのところに走り続けた。

おじさんのうちに逃げて、僕は施設で暮らすことになった。僕は施設でなく、おじさんのうちで暮らしたいと何度も思った。でも、おじさんのうちに逃げていなかったら、僕は死んでいたかもしれないと思う。僕は死んで、お母さんは刑務所に入っていたと思う。おじさんは命の恩人。でも、僕はお母さんに殺されてしまっていたほうがよかったかもしれないと思うときが16歳になった今でも時々ある。

引用：「愛されなかった私たちが愛を知るまで　傷ついた子ども時代を乗り越え生きる若者たち」（石川結貴・高橋亜美、かもがわ出版）

居場所づくりの本当の意味

このお話の中に、豆腐屋のおじさんが出てきました。何か特別なことをしたでしょうか。子どもが帰るころに店の前に出て「お帰り」と声を掛けて、名前を聞いて「カズキ君」と呼んでくれて、けがをしていたら、痛くないかと心配してくれただけです。

それまではずっと痛みに耐え、僕が悪いと思って我慢していました。それが人に大事にされて初めて痛みを知り、何でこんなことをされるのかということに気付いた。人は大事にされなかったら、気付かないのです。居場所というのは、子どもたちが大事にされることに意味があります。大事にされる子は、「助けて」と言えるようになるのです。この作文を書いた子も、逃げることができました。逃げた先は学校でも警察でも電話相談でもなく、おじさんの家でした。居場所とは、いざというときに駆け込める場所です。居場所ができたからといって、残念ながら家庭の環境も変わりませんし、学校の状況も変わりません。それでも子どもはそういう場所が１カ所あったら頑張れるのではないかと、私はずっと居場所づくりに関わってきて感じています。

では、これにて私の基調講演を終わらせていただきます。ありがとうございました。

分科会概要

分科会 1

身近なまちで育まれる縁
～まちで寄り添い　支える暮らし～

実践報告

(1) 困りごと引き受け隊／第3地区社会福祉協議会／麦田地域ケアプラザ【中区】
(2) 横浜市南部学校教育事務所スクールソーシャルワーカー／磯子区こども家庭支援課／磯子区社会福祉協議会【磯子区】
(3) グループ男の手貸します／中屋敷地域ケアプラザ／瀬谷区社会福祉協議会【瀬谷区】

ねらい

制度の狭間にある一人ひとりのＳＯＳを地域住民と専門職が分かち合い、それぞれが知恵を出すことで、支え合いの地域へとつながっています。多様な人々が関わり話し合いを重ねていく中で、個別の課題解決だけではなく、地域全体の取組として広がり、周りの人を気にかける地域の風土が醸成されます。

本分科会では、一人ひとりの暮らしに向き合うことで育まれていった支え合い活動のプロセスを振り返りながら、「暮らしを支える地域づくり」の必要性について考えます。

コーディネーター

永田 祐 氏

同志社大学 社会学部 社会福祉学科 教授

専門は地域福祉。立教大学助手、愛知淑徳大学講師等を経て現在に至る。「志」のある実践者同士が出会い、つながり、つくりだす地域でのさまざまな活動や、それを可能にするための仕組づくり、市町村を中心とした「困っている人」を真ん中においた支援の仕組づくりについて研究している。

社会福祉士として、成年後見など、権利擁護の活動に関わっている。

分科会 2

縁でつながるまちづくり
～つながりで芽吹く支えあい～

実践報告

(1) 名瀬地区ハートプラン推進委員会・名瀬連合町内会／名瀬地域ケアプラザ／戸塚区社会福祉協議会【戸塚区】
(2) スペース谷津坂／金沢東部地区社会福祉協議会／金沢区社会福祉協議会【金沢区】
(3) NPO法人おもいやりカンパニー／中村地域ケアプラザ【南区】

ねらい

住民、福祉・医療関係者、企業、ＮＰＯ、学校など地域にあるさまざまな主体のつながりが、それぞれの強みを活かしてまちづくりに新たな風を吹き込みます。

この分科会では、地域共生社会の構築や地域包括ケアシステム、生活支援体制整備事業等でも求められる多様な領域・主体の連携のあり方や、新たな分野との協働の可能性、その取組や連携のポイントについて、さまざまな機関をつなぎながら実現した３つの実践事例から共有します。

コーディネーター

平野 友康 氏

横浜創英大学 こども教育学部 講師

横須賀市社会福祉協議会にて21年の勤務を経て、2017年より現職。

横須賀市社会福祉協議会では、身近な地域での福祉活動の支援、生活困窮世帯の相談や支援等を担当し、人が人を支える意味や意義について学ぶ。

現職では、児童家庭福祉・障害児保育・社会的養護等の講義を通じ、地域の視点から子どもを取り巻く生活環境をより良くするための問題提起や提案等を日々行っている。

分科会 1

身近なまちで育まれる縁
～まちで寄り添い支える暮らし～

コーディネーター／永田　祐 氏（同志社大学 社会学部 社会福祉学科 教授）

最初に、導入として地域社会や社会福祉の現状についてご説明します。今日のテーマに関連して、昨年来、いわゆる8050世帯といわれる世帯で深刻な事件や問題が起こり、多くの人が関心を寄せるようになっています。私なりにこうした事件や問題を考えてみると、問題が深刻化してしまった背景には、大きく二つの要因があるのではないかと思っています。

１つは、「50代の引きこもりの息子の問題」が制度のはざまにあり、児童でも高齢でも障害でもなかったため、どこに相談していいかが分からなかったという点です。もう１つは、家族が「こういった問題は自分たちで解決しなければならない」と強く思い、問題を抱え込んでしまったのではないかという点です。

結果として、世帯は問題を抱えながら孤立してしまい、誰にもSOSを出すことができずに最悪の結果を招いてしまったのだろうと思います。

このように非常に困難な状況に陥っている世帯の問題は例外的ではなく、日本中に広がっているのではないかと思います。その背景として、頼れる人がいない人が非常に増加している現状があります。幾つか要因を挙げてみましょう。

１つは家族です。家族に頼れない人が非常に増加しています。少子化が進んで、結婚しない人も増えています。そのため、単身で暮らしていて誰にも頼れない高齢者が増加してきているのです。

また、非正規雇用の人が増加し、雇用が安定しないことに加え、将来の見通しがつかないが故に結婚や家族を形成できない人が増加していることも要因の1つです。

さらに、地域のつながりも、希薄化しています。『神戸新聞』という地方紙の投書欄に、こんな投書がありました。ある若いお母さんがマンションの理事会で「知らない人があいさつしたら逃げるように教えているので、マンション内ではあいさつするのをやめるようにしてください」と提案されたという投書です。これは１つの例ですが、近年は職住分離が進み仕事に行って、家は寝に帰ってくるだけという人が非常に増えていて、残念ながら地域のつながりも希薄になっているのです。

永田　祐
（同志社大学 社会学部 社会福祉学科 教授）

家族にも頼れない、安定した雇用にも就けない、地域にも頼れる人がいない。私たちはこういった問題のことを「社会的孤立」と呼んでいます。社会的孤立の課題を解決していくためには大きく２本の柱があります。

１本目の柱は、地域の力を高めて、地域の中に役割や出番を持てる居場所をつくるということです。

２本目の柱は、世帯の中に複数の課題があるのだったら、対応する専門職や行政は連携して、丸ごと世帯を受け止められる支援をしていくことです。

では具体的にどうしたらいいのかは、「のりしろ」がキーワードになるのではないかと思っています。つまり、それぞれができることを少しずつ出し合って、それを重ね合わせていくことで大きな力にしていく発想が必要ではないかと考えています。

実践報告 01

活動が地域の縁を創り出す
～ちょこっとボランティアで拡がる地域のつながり～

困りごと引き受け隊・第３地区社会福祉協議会・麦田地域ケアプラザ【中区】

荻野　私たちからは、「困りごと引き受け隊（以下、引き受け隊）」というボランティア活動を通して広がった地域のつながりについて紹介します。

引き受け隊が対象としている第３地区は、中区の真ん中に位置し、観光地に囲まれた山坂の多い住宅街です。坂や階段が多いエリアは車が通れない細い道も多く、ごみ出しや買い物などさまざまな生活の困り事を抱えた人が住んでいます。

引き受け隊が結成されたきっかけは、第３地区社会福祉協議会（以下、地区社協）の副会長でもあり、地区民生委員児童委員協議会（以下、地区民児協）の会長でもある齊藤会長から「住民同士の助け合いでちょっとした困りごとを解決できないかな」とご相談をいただいたことでした。

齊藤会長は以前、よこはま地域福祉フォーラムで他区のボランティアグループの取組をお知りになって、ぜひうちの地区でもやりたいと思われていたそうです。

齊藤（憲）　私は今年で民生委員18年目に入ります。皆さんのご要望に民生委員だけで応えようとすると大変なので、お互いに横のつながりで助け合いができないかと考えました。地域ケアプラザ（以下、ケアプラザ）に相談したところ、事務的なサポートをしてくれると聞いて、本当に心強くなりました。

荒木　当時、ケアプラザの担当地域内の一人暮らし高齢者は1,800世帯を超えていて、高齢夫婦のみの世帯も多く、介護保険だけでは解決できない相談が増えて悩んでいました。できること、得意なことを生かせる生活支援ボランティアのグループができれば、ボランティアの活動層を広げられるのではないかという意見で一致しました。

荻野　ここから第３地区でのグループの立ち上げを目指して、地域の皆さん、ケアプラザ、区役所、区社会福祉協議会（以下、区社協）などさまざまなメンバーで、グループの骨格を検討し、平成30年10月に引き受け隊が発足しました。

荒井　政敏（困りごと引き受け隊　副代表）
齊藤　　章（困りごと引き受け隊）
齊藤　憲明（第3地区社会福祉協議会　副会長）
荻野　　尚（麦田地域ケアプラザ　生活支援コーディネーター）
荒木　千穂（麦田地域ケアプラザ　主任ケアマネジャー）

齊藤（章）　引き受け隊の活動内容は、「ボランティアチームでできる皆さまの困り事は原則何でも引き受ける」というものです。スタート時は「草むしり、庭木の手入れ等々」でしたが、活動を積み重ねる中で、カテゴリーはいいから何でも引き受けましょうという流れができつつあります。

依頼の８割、９割は民生委員とケアマネジャー経由で来ています。どの部分がどう困っているかはかみくだいて説明されるので、見かけ上の困っていることを超えて本当に困っていることの支援ができるので助かっています。お互いにとって非常に良いサポート関係ができていると思います。

また、活動を通じて、ボランティアを引き受け、行動に移せる人の共通点は、前向きで肯定的に物を見ることができる人だという特徴が見えてきました。

荒井　引き受け隊は現在26名で活動をしています。私はコーディネーター役をやっていて下見を担当しています。活動するときには、依頼者の近くに住むボランティアにお願いして、顔なじみになるようにしています。

活動してよかったと思えるのは、依頼者に喜んでもらえることで、活動のはげみになっています。

大変なのは、庭木の手入れをした後のごみ出しまでやるため、別の日にも行かなければならないことです。

荻野　依頼者の声を紹介します。草むしりを依頼されたAさんは、「雑草を取り除いてもらった後、自分でも草むしりをやる気になった」というお話をいただきました。引き受け隊の活動が意欲を引き出すきっかけになった出来事だったと思います。

椅子の組み立てを依頼したBさんは「ボランティアさんが組み立て以外に、段ボールの片付けも受け入れてくれてすごくよかったし、その方と外のスーパーで会ったら、そこでもあいさつをしてくれた」とのことでした。このように新たなつながりが生まれていることを私も実感しています。引き受け隊の活動があることで、困ったときには頼りにできるという安心感につながっているのではないかと感じています。

また、活動をきっかけに、「ボランティアにまかせるだけではなく、自分も一緒にやってみようと思った」という声もよく聞きます。困り事の解決だけでなくて、依頼者のその後の生活までいい影響が生まれているようです。

引き受け隊を通して広がる地域のつながりについて、いくつかにまとめました。

１つ目は、依頼した人とボランティアが、活動を通して出会い、顔見知りになります。

２つ目は、ボランティアが家の様子を見て「ほかにもこんなことに困っていそうだったよ」等、気になったことがあればすぐケアプラザに伝えてくれます。

３つ目は、引き受け隊が依頼者に地区社協で開催している食事会にお誘いしたことでその人が食事会に参加した例がありました。引き受け隊が声を掛けることで、新たな人々とのつながりができています。

４つ目は、民生委員やケアマネジャーだけでは解決が難しかった困り事も、引き受け隊の活動で解決できたケースがありました。

荒井　今後も引き受け隊として、地域のお年寄りや障害のある人が安心して生活できるようなサポートをしていきたいと考えています。また、ボランティア活動に参加してくれる仲間づくりも必要かと思っています。最終的には、民生委員やケアマネジャーが聞いていても解決が難しかった生活の困りごとを、引き受け隊が応えられるようにしていきたいと思っています。

齊藤（憲）　困りごと引き受け隊は率直に分かるネーミングなので、多くの皆さんに理解していただき、誰もが安心して地域で住めるように支えていきたいです。地域での縁を結ぶ共生社会をつくりあげる点で、今後も活躍していきたいと思っています。

コメント comment

「困りごと引き受け隊」という名前がすごくいいと思います。あえて曖昧にして、お引き受けする範囲を緩くされている印象です。また、荒井さんのお話で「できるだけ近くの人をマッチングする」というのが素晴らしいと思いました。その後のつながりまで考えてコーディネートされています。みなさんの活動は、まさに今日のテーマである「えにし」をつくっていく活動です。

もう１つ印象深かったのが、人とのつながりの中で意欲が湧いてくる点です。ボランティア活動をしている人は前向きで肯定的に物事を捉えるとおっしゃっていましたが、皆さんが本当に前向きに課題解決に取り組んでいらっしゃる、素晴らしい地域の活動でした。　（永田）

実践報告 02

こどもたちの困りごとを地域で支える
～地域と専門機関の協働のあり方～

横浜市南部学校教育事務所スクールソーシャルワーカー／磯子区こども家庭支援課／磯子区社会福祉協議会【磯子区】

清水　本日紹介するケースは父子家庭で、小学校５年生の息子さんと二人暮らしです。お父さんは朝早くから夜遅くまで仕事しており、日中はお子さんが一人です。夜もお父さんが帰ってくるまで待ってから食

事を取るため、朝起きられないという事例です。

最初は小学校５年生の冬に、学校からスクールソーシャルワーカーに「この子どもに対して支援ができないか」と相談が入りました。学校からの情報を整理した結果、地域の力を借りながら登校できる方法を考えようということになり、区社協に相談をしました。

西谷　区社協では「朝に起こしに行く地域人材」を探すことになり、ケアプラザのコーディネーターに相談をしました。ケアプラザは心得ていて、地区民児協の会長に相談し、この親子の支援をしてくれる人をすぐに紹介していただきました。

次に、本人とお父さんと支援者の顔合わせ会を開催しました。このケースについては、保護者が地域の方の介入を了承してくれたから実現した支援です。併せてスクールソーシャルワーカーが地域を信頼してくれたことがスタートだったと思います。

顔合わせ会では本人の思いや、支援に入るに当たってのルールについて話し合いました。その結果、「鍵は支援者が預かり開けて入って起こす」「起こしても起きられなかった日は登校を諦める」「小学校卒業まで」と期間を区切って支援すること等を確認し、この日から程なくして支援がスタートしました。

その際、「子ども食堂に手伝いに行ってみない？」という話したところ、うれしそうだったため、子ども食堂のスタッフにも協力を仰ぎました。

清水　支援者はその後、お父さんのよい相談相手にもなってくれました。お父さんは、息子さんのことについて相談できる人が身近にできたことについて、私たちにも感謝の気持ちを伝えてくださいました。道で支援者と会うと、立ち話ができるようになったそうです。そのときにお子さんの話を聞くと、自分が知らない子どもの姿を知り、その分、客観的にお子さんを見られるようになった、お子さんの気持ちを少し受け入れやすくなったというお話をされていたそうです。

また、協力を仰いだ子ども食堂はこの男の子だけではなく、子どもたちみんなに対して安心して過ごせる場であることを大切にして活動されています。

この男の子がここにお手伝いとして参加することによって、どうしても普段の生活だけでは学びきれない食事のマナーや、料理の手順、季節感などを伝えてくれるのではないかと期待して声掛けをさせていただきました。

清水　克修（南部学校教育事務所統括スクールソーシャルワーカー）
東　　宏子（磯子区福祉保健センターこども家庭支援課担当係長）
西谷　裕美（磯子区社会福祉協議会）

特にこの男の子はご本人の面倒見の良さもあって、人との交わりをあまり拒否されなかったので、皆さんにはお手伝いという形ですんなり受け入れてもらえました。

東　今回のケースについて、私たち区役所の虐待対応チームは学校から「養育不全の恐れがある世帯」と相談を受けていました。区役所が直接的に何か支援を要する段階かどうか調べ、一番大事な危険回避の保障が学校中心でなされた上で、私たちの出番ではないと判断されていたケースでした。

こうして地域の支援が動いていたことを知り、安心して見守らせていただいていました。区役所としては、何か家族の変化があったときに、地域の皆さんから情報をいただき、その時には一緒に考え、支援を改めて組み立てるところを頑張る立場だと認識しています。

西谷　支援者が入ることによって、毎日ではないけれど学校に通える日も増え、卒業を迎えることができました。本人の希望もあって、卒業式には支援者も招かれ、彼がそこで「中学に入ったらこんな部活に入りたい」などの夢を発表したと聞いています。

小学校卒業までという約束どおり、支援は終了しましたが、残念ながら現在中学校にはほとんど登校できていません。再び支援者が入って起こしに行くことも考えましたが、子どもの状況が変わっていて、今の思春期の彼へのアプローチを考えているところです。

先日、子ども食堂のスタッフに「実はもう学校に通えていない」と伝えると、「勉強だけでも家に行って見てあげることはできますよ」という話が出ました。このご縁を次に活かしていきたいと考えています。

コメント comment

この事例では専門職の皆さんと地域の皆さんがそれぞれ役割分担をして、できることを発揮しながら支えてきたケースでした。

特に複合的な課題の場合一つの機関や一人の専門職だけで解決していくことは難しいです。今の事例の中では「これは学校ですね」「これは児相でやってください」と、誰かに押し付けるのではなくて、連携し、少しずつのりしろを出し合って制度のはざまに落ちないようにすることが大事だとあらためて気付かせていただきました。

あと、この事例のお父さんは、抱え込まずに「助けて」と言える関係が地域にできたのもすごく大事なことではないかと思います。関係機関も抱え込まずに専門職同士がうまく連携し、本人も「助けて」と言える関係を地域とつくれました。今学校に行けなくなっているということでしたが、地域の中に気遣ってくれるおじちゃん・おばちゃんがいることは本当に大事なことだと思って聞かせていただきました。

この子自身も、子ども食堂に手伝いに行くなど、強みのある子だと思うので、こういった地域との関係の中で成長していってくれるといいと思いました。（永田）

実践報告 03

困窮世帯を支えた地域の力
～制度の狭間に寄り添う～

石川　直良（中屋敷地域ケアプラザ　主任ケアマネジャー）
岩田　陽介（瀬谷区福祉保健センター高齢・障害支援課）
木内　　等（グループ男の手貸します）
丸山　敦子（瀬谷区社会福祉協議会　生活支援コーディネーター）

石川　2017年３月、町内会長より「高齢の母親と息子の二人暮らしで心配な家がある」とのお話があったため、区役所の高齢支援担当職員とケアプラザが訪問しましたが、介入には至りませんでした。

それから半年後、町内会長の説得もあり、母親の介護保険申請を行うことができました。要介護認定が下りるも、母親と息子さん共に利用の必要性を感じず、利用には至りませんでした。

さらに半年が過ぎた2018年３月、突然息子さんがケアプラザに来所しました。「母親が立てなくなり、受診したいので人手を借りたい」と言うのです。すぐに自宅に訪問すると、母親が玄関でタンスと壁の間に挟まり、丸２日間動くことのできない状態でした。救急車を要請し、救出してもらい、搬送したことがきっかけで介護保険サービス等の導入につながりました。

ここで、ようやくこの家庭の詳しい状況がわかりました。世帯は80歳代の母親と、50歳代息子さんの二人暮らし。息子さんは契約社員で、ガスと水（ここの自宅は水道・下水道が通っていなくて井戸水です）は10年以上止まっており、居間の床は３分の２が陥没していました。住宅の劣悪な状態は10年以上も続いていました。

１階全体が衣類で埋め尽くされており、通路も家具で狭められています。トイレに至ってはドアの前に１メートルぐらい衣類が積み重なっており、ドアが開けられない状態でした。ドアが開けられたとしても下水道が通っていないので、使うことはできません。

この世帯のごみがたまったきっかけは、日常のごみの出し忘れや、粗大ごみ等の出し方が分からず、迷っているうちに自分達ではどうにもならない状況になったというものでした。しかも息子さんは住宅修繕の相談中に就労契約の更新ができず無職となり、住宅修繕の費用捻出がますます困難となりました。

ケアプラザと区役所は現在の家で生活することは

困難と判断し、公営住宅等に転居を勧めましたが、親子は亡き父が購入した思い入れのある家なので、現在の家での生活を希望しました。しかし、居間はいつ陥没してもおかしくない状態であり、母が生活するスペースだけでも早急に修繕する必要があるため、支援者で話し合いの場を持ちました。

丸山　私たちは親子との関わり、特にキーパーソンの息子さんとのコミュニケーションに時間を費やしました。キーパーソンである息子さんが「やろう！」と覚悟が決まるまで１年ちょっとありましたが、その間も支援チームが「あのおうちはどうなった？」と気にしながら本人たちの気持ちが動くのを見守る関係を続けました。

その間、実は地域の人たちの支援が動いていました。大量のごみを処理する際に、町内会長が近所の人への声掛けと集積所の見回り、道路にはみ出ているものの整理などを毎回してくれていたことを後から知り、本当にありがたく感じました。

岩田　支援が進むにつれて見えてきた親子の変化の中で一番大きかったのは、息子さんが自ら家の中のごみを片付け始めたところでした。「男の手貸します」の皆さんが実際に床の張り替えの作業に取り掛かり始めたころから、息子さんに変化が生まれ始めました。息子さんが、「ここでやらなきゃ人として駄目ですよね」と自ら発言し、次の日には室内のごみを一人で片付けて、ボランティアが作業にスムーズに取り掛かれるようにしていました。地域の人たちが自分のためにやってくれている姿が、息子さんの心に届いたのだと思います。

木内　最初に、2018年６月、区社協の丸山さんよりわれわれ「男の手貸します」に話がありました。メンバーにいる元大工の棟梁と７月に下見をして、作業可能と判断しました。

息子さんの決意が固まるまでの１年間も「我々がやらなければこれはできないだろう」という熱意を持ち続けて待ちました。

実際に作業を始め、畳を上げてみたら基礎部分も全部が腐っていたのです。のこぎりもなたも必要なく、ただ手で取ってごみ袋に入れるという惨状でした。

土台から作り直して畳を入れ、フローリングも張り替え、台所の機器やトイレ、お風呂も専門業者に入れ替えをしてもらいました。

最初のショック、１年間のブランク中の熱意持続、完成したときの喜び、参加した人はどれも感じたものと思います。

岩田　私たちチームは今回この親子に関わるに当たって、「親子の考えを受け止める、親子のペースを守る、関わり続けることを諦めない」というスタンスで関わりを継続してきました。支援者で話し合いを行う中では、母親の施設入所についても議論しました。そうした中でもここまで長く関わり続けてこられたのは、「誰かがやればよい」ということではなく、この家庭に関わる人たちの誰もがそれぞれの立場で「この家や親子を何とかしたい」「自分たちはこれができる」と自発的に提案し続けてきたからだろうと考えています。

丸山　今はこの親子の支援目標が達成されて、ひとまず支援メンバーは解散しています。今後この親子に必要なことは、家族以外の人との関わりを絶やさないことだと思います。私たちは、今回の件でつながって育んだ人との縁をありがたく感じています。この親子も含めてその関係が続けられるように今後も寄り添っていきたいと思っています。

コメント comment

皆さんで支援をした力はきっと地域に蓄積されて、この事例だけではなくて別の事例でも生かされていくだろうと思って聞かせていただきました。

我々は本人から支援が求められない人を「セルフネグレクト」と言います。恐らくその背景には、いろいろな思いや絶望が長年の間に積み重なって、そういう状態になっているのではないか。そこを皆さんで協力しながら解きほぐして、本人が「助けて」とおっしゃるまで待って支援をされた素晴らしい事例でした。　（永田）

まとめ

今日は三つの事例をご報告していただきました。「のりしろ」「横につながる」がキーワードだったと思います。皆さんが緩やかなのりしろを出してくださることで、こぼれ落ちない支援をしていく。専門職同士の連携だけでなく、地域の皆さんと横につながることが大切だということを、ご理解いただけたのではないでしょうか。

私はこのことを説明する際、「福祉でまちづくり」とか「福祉の出来事を地域の出来事に」という言い方をしています。

例えば子どもの問題の場合、「虐待の問題等は専門職の問題だ」としてしまうと、「福祉のことだったら役所に電話しよう」「私は電話をして専門職に言ったから、この問題は終わり」となってしまいます。そうではなくて、地域の皆さんと一緒に考えることで、地域の皆さんが自分事として考えていただけるようになります。今回発表していただいた事例は、みんなそうだったと思います。福祉の出来事でとどめてしまうのではなくて、地域の皆さんで問題を一緒に考えていくことが大事だとあらためて気付かせていただきました。

私が三つの事例を通じて、非常に勉強になったと思ったことを最後に紹介したいと思います。

まず、つながりを自らつくることが難しい人が非常に増加してきています。そのときに「自己責任でしょう」と突き放したり、犯人捜しをしたりするのではなく、寄り添って伴走していく支援が必要だと改めて感じました。最近はこうした支援の形式を「伴走型支援」と呼んでいます。この伴走型支援がしっかりできていることで、人はつながりの中で生きていく意欲や気持ちが持てるのだと改めて感じました。孤立ではなくつながりをつくる、えにしをつくる、その大切さを改めて感じたところです。

次に、活動している人の声を聞くと、受け手・支え手と分けてしまうのではなくて、地域のいろいろな人が役割を持って輝けることが非常に大事だということです。最近は「参加支援」という言葉があります。今回の発表でいうと二つ目の事例で、子どもが朝起こしてもらう支援を受けるだけではなくて、子ども食堂を手伝うことでその能力を発揮してもらったのが非常に良い例でした。こういう発想がこれから大切になってくるのではないかと思います。

そのためには、専門職や地域の皆さんがなるべく早い段階で、課題が深刻になる前に気付くことが大切だと思います。どうしようもなくなってからではなくて、そういうことが起きないような関わりが大事なのです。そういう意味では地域の中で「助けて」と言える関係性をつくっていく。関係機関同士も、「これは私の仕事じゃないわ」ではなくて、「一緒に考えよう」と声を掛け合える横のつながりが大切ではないかと思います。

地域の活動の素晴らしさを今日改めて感じたのですが、地域の皆さんと連携していくときに大切なのは、地域活動は、手段ではなくてつながりをつくることに価値があると認識することだと思います。私はいつも、住民活動を「サービス」と呼ぶのをやめてほしいと訴えています。サービスを提供しているのではなくて、地域の中でつながりをつくっているのです。地域生活の中で見えてきた課題を、お手伝いしているわけです。当然できないこともありますし、地域だからできることもあります。それは介護保険のようなサービスではない、そこに素晴らしさがあるのだと改めて感じました。専門職の皆さんは地域活動の特性をしっかり理解して、地域の皆さんと連携していただきたいと思います。

誰かに「助けて」と言える地域をつくっていく、地域の中に居場所があって、孤立しない地域づくりをしていくことが大切です。三つの事例を通して、つながり、縁が、私たちが生きていく希望をつくることを勉強させていただいた一日でした。どうもありがとうございました。

（永田）

分科会 2

縁でつながるまちづくり
～つながりで芽吹く支えあい～

コーディネーター／平野　友康 氏（横浜創英大学 こども教育学部 講師）

実践報告 01

多様な主体で地域を包む
～名瀬地区買い物移動支援の取組～

【戸塚区】

阿部　名瀬町は戸塚区の最北端にあり、北には山を開発した、たかの台自治会、南には急坂に戸建ての住宅地が続く名瀬第一町内会があります。現在、買い物支援はこの２つの地域で行っています。名瀬地域ケアプラザは南北の中間地点にあり、買い物の店舗となっているマルエツ名瀬店は地域のほぼ中央にあります。

名瀬町の概況は2019年現在、人口１万4,484人で65歳以上の高齢者は4,027人です。高齢化率が27.8％と高齢化が徐々に進み、独居の高齢者や高齢者世帯が増え続けています。連合町内会には４つの町内会と11の自治会があり、ミニデイサービスや助け合い活動など、福祉活動が活発に行われています。買い物移動支援のきっかけは、ケアプラザへの相談で「買い物帰りにバス停から荷物を持って坂を歩くのが大変」、「近くに店がないので、バイクで買い物をして転倒してしまった」などの声が聞かれるようになったことです。

連合町内会会長に相談した結果、名瀬地区の地域福祉保健計画名瀬地区ハートプラン推進委員会で「移動支援検討部会」を立ち上げ、生活支援体制整備事業の協議体として検討することになりました。

第１回移動支援検討部会には、自治会・町内会、地区社協、民生委員、老人クラブ、ボランティア連絡会、支援チームとして区役所、区社協、ケアプラザが参加しました。対象地区はたかの台自治会と名瀬第一町内会、参加者は独居高齢者や高齢者世帯で、見守りは必要だが歩行・買い物・会計ができる人、選定委員は民生委員が中心で行い、付き添いは地域のボランティアが行うことが決まりました。たかの台自治会では毎月第２・４木曜日、午後１時に送迎車がケアプラザを出発、数か所の待ち合わせポイントで参加者とボランティアを乗せてマルエツ名瀬店に到着。40分買い物をして、また自宅に戻ります。参加者は５名程度。ボランティアは地域のミニデイサービス「しらさぎ会」と助け合い活動「ラブリーなせ」の人たちです。

新井　敏行（名瀬地区ハートプラン推進委員会／名瀬連合町内会）
阿部ひろみ（名瀬地域ケアプラザ　生活支援コーディネーター）
伊東　正又（名瀬地域ケアプラザ　地域活動交流コーディネーター）
小泉智恵美（横浜市戸塚区社会福祉協議会事務局次長）

名瀬第一町内会では、送迎車の提供者を募ることが課題に挙がりました。地域にある福祉系施設や株式会

社、病院の合計４事業所を対象に「地域貢献に関するアンケート」を行ったところ、介護保険事業所「ゆあーずデイサービス」からすぐに協力できるとの回答をいただきました。毎月第１・３木曜日、午後１時30分にゆあーずを出発、参加者は４名。ボランティアは第一町内会の役員と地域のミニデイサービス「いきいきサロン名瀬」の人たちです。

買い物移動支援に取り組んだ効果として、自治会、民生委員、ボランティア、老人クラブ、サービス事業所やケアプラザなどの間の交流が活発になりました。また、買い物移動支援や振り返り会、打ち合わせ会で、地域の高齢者の情報を共有することで、緩やかな見守りができるようになりました。地域福祉保健計画の中で話し合うことで、地域の人たちが日ごろ接する機会が少ない民間サービス事業所、社会福祉法人、ケアプラザ、区社協、区役所などと連携がとれるようになり、お互いの垣根が低くなりました。

新井　名瀬は、約130年の歴史と伝統の中で昔から住みよい町と言われていますが、やはり高齢化が進んでいます。この取組が未来をつくると言うと大げさかもしれませんが、新時代の幕開けになればと強い気持ちでやっています。

コメント comment

買い物には物を選ぶという楽しさがあります。坂が多くて買い物帰りにバス停から荷物を持って歩くのが大変というつぶやきを見逃さなかっただけではなく、課題として明確にしたことが地域全体の取組につながったと思います。この取組には、地域のボランティア、地区社協、町内会、民生委員といった地縁に関わる団体、ケアプラザ、区社協、区といったそれを支える組織、そして施設、病院、民間事業者など、多様な主体が関わっています。

多様な主体がつながることは、言い換えると、多様な人がつながるということです。交流と緩やかな見守りと連携が買い物の移動支援だけではなく、ほかの活動にもつながっていると思いました。（平野）

実践報告 02

地域の声から生まれた活動
～人が育ち、地域が支える～

【金沢区】

大泊　私たちの地域には小・中学生が放課後に集まれる拠点がありません。公的な拠点が建つ見込みがない中、地域の中心にある町内会館を拠点にしたいと発想を変えて、地域活動者養成講座を受講しました。講義やワークを通して活動の立ち上げまでのプロセスを学び、連合町内会の会議で拠点立ち上げの承認を得ました。町内会館運営委員会に相談し、１カ月に２回、第２・４水曜日の午後を年間予約できました。実行委員会を立ち上げ、名称に町内会館の名を入れて「スペース谷津坂」としました。各自治会・町内会にボランティア募集の回覧を実施し、２名の応募者がありました。

大橋　その２名のうちの一人が私です。ちょうど仕事を辞めて時間があったのと、子どもが好きだったので興味を持ちました。さらに、大泊さんとは30年ほど昔に面識がありましたので、ご縁を感じました。

大泊　地域の小・中学校の校長先生に連携と協力のお願いをしました。保護者および地域住民を対象に説明会を開き、スペース谷津坂は学童保育またはキッズとは違うこと、預かるのではなく見守りであって、いわば室内公園のようなものなので、自己責任で利用してもらいたいと説明しました。そして2016年10月にスタートしました。活動資金は、2016年４月か

大橋　裕子（スペース谷津坂）
大泊　葉子（金沢東部地区社会福祉協議会）
長谷川広貴（金沢区社会福祉協議会）

ら翌年３月までは、金沢区の補助金と地区社協の補助金で、2018年４月から現在までは、金沢ふれあい助成金と地区社協の補助金で運営しています。

大橋　活動の目的は、子どもたちの放課後の居場所として児童館的役割を担うこと。地域の大人も呼び込んで、地域の中でじじ・ばばと孫たちが触れ合う場所となることです。開室日は、隔週水曜日でしたが、隔週では子どもに定着しづらいらしく、来る子は多くはありませんでした。2018年度に金沢ふれあい助成金を申請し、毎週水曜日にしたところ延べ750人の子どもが訪れて次第に定着してきました。退室時間は暗くなる前に家に着くように、３月から９月は５時半まで、10月から２月は４時半までとしています。春夏冬休み期間は午後１時半から開けてゆっくりと遊べるようにしています。

周知活動としては、年度初めに学区の小・中学校を訪問しチラシの配布をお願いしています。また、小・中学校とも校内にはスペース谷津坂のチラシを掲示していただいています。学校のきまりで一度家に帰ってから来なければならないために、家が遠い子は来にくいという現状があります。開室場所が増えるといいなと願いつつ、社協のホームページや町内の掲示板などで定期的に現状報告をして、ボランティア募集にも力を入れていくつもりでいます。地域の他団体やシニアクラブなどと連携することによる世代間交流も期待しています。

今後は、子どもや保護者に感想や要望を聞き、ニーズを探っていきたいと思っています。今届いている意見は、子どもからは「水曜日だけではなくもっとたくさんやってほしい」、大人からは「自由に遊べる場がうれしいのでこのままでいいよ」などです。「子どもが学校でいじめに遭ったときに、スペース谷津坂が避難場所になっていました、ありがとうございます」と言われたこともあります。

大泊　次に、世代間交流事業「作って食べよう！」についてお話しします。地区社協としては、食を通して世代間交流をしていきたいという構想があります。その先駆けとして、夏休みに、シニアクラブの趣味の会とスペース谷津坂の合同で「お好み焼きをつくって食べよう」を実施しました。食後の後片付けも、ゴミの分別も子どもたちと一緒に学びながら行いました。シニアのメンバーから、「得意の料理で地域のお役に立てるという実感がもてた」、「子どもたちと知り合いになれ、楽しかった」との感想があり、ここにまた新たなご縁ができました。

核家族化が進む中、子どもたちが地域の人と交流し、見守られ、地域の中で豊かに育つことが社会性の向上につながると思います。今後も地区社協が中心となって継続していきたいと思っています。昼間の地域は子どもと高齢者が占めています。子どもたちは人と人とをつなぐ力をもっています。次世代を担う地域の「タマゴ（他孫）育て」をすることで、シニア世代が地域で生き生きと暮らしていけたらと思います。

大橋　地域を見渡してみますと、町内会、地区社協、ケアプラザ、学校、そして既にたくさんの団体が活動しています。身近な組織や団体と縁をつないでいくことで、地域のみんなで地域の子どもたちを育てていきたいと思います。

コメント comment

地域のみんなで子どもを育てていくという思いを地域で共有したことが、よりよい活動につながっているのだと思います。居場所をつくるとともに、地域の社会参加の場になっているから、一つの活動が複数の効果につながり、重なり合って支え合っている、そんな活動だったと思います。改めて子どもの育ちには身近な縁がとても大事だと感じました。　（平野）

実践報告 03　地域課題に取り組む子育てママたちの挑戦！
～安心して暮らせる街づくり～

【南区】

石村　中村地区は南区の東部に位置し、中区・磯子区との区境にあります。圏域の人口は約１万5,000人。

高齢化率は約29.5％です。坂や階段がとても多い地区で、中村地域ケアプラザのマスコットキャラクター「さかのすけ」の「さか」は、中村地区の特徴である坂の多さに由来しています。

津ノ井　NPO法人おもいやりカンパニーのメンバーは約20名、中村地区在住の30代・40代の子育て世代のママたちが中心ですが、最近では地域の高齢者にもお手伝いをいただいています。主な活動内容は、パンと野菜の販売会「ママ・マルシェ」の開催、空き家を活用した多世代交流拠点「おもいやりハウス」の運営、横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業（サービスB）として買い物代行や通所プログラムの提供等です。

石村　取組内容を時系列に４つのステップに分類しました。まず第１ステップとして買い物支援活動を開始した経緯をお話しします。

津ノ井　私は今から12年前、結婚を機に横浜に来ました。初めての土地での子育てで不安でいっぱいでしたが、中村地域ケアプラザの子育て広場やイベントへの参加が大きな支えになりました。その後、ママ友仲間と子育てサークル「たまっこくらぶ」を立ち上げました。立ち上げ当初から、地域の子どもたちのために盛大なハロウィーンパーティーを開催したいという目標があり、2017年10月に実現することができました。以降毎年開催しており、今年度は250人を超える子どもたちが参加して地域の一大イベントとなっています。

石村　同時期に、南区役所の企画で「南区地域の居場所づくり勉強会」が全４回開催されました。勉強会では、中村地区をケーススタディー地区としてまちづくりの専門家、南区役所、横浜市関係局、中村地域ケアプラザの職員など約20人が集まり、中村地区の街歩きや金沢区での事例見学を通して空き家の活用や助成金、民間ファンドの活用など、地域課題の解決に向けた手法について学び、ディスカッションを行いました。勉強会終了後、そこで得た知識や制度を中村地区でも活用できないかと検討を始めました。

津ノ井　ハロウィーンパーティーは、ママ友仲間に加え、地域の高齢者にもご協力をいただきました。その中で、もっと地域の方と交流したいという思いが強くなりました。また、「最近は足腰が弱くなって買い物に困っている」という一言がきっかけとなり、ケアプラザと相談して、任意団体「おもいやり隊」を結成、買い物支援を始めました。

津ノ井美晴（NPO法人おもいやりカンパニー理事長）
石村　　篤（中村地域ケアプラザ生活支援コーディネーター）

坂の上の地域で、2018年２月にパンと野菜の販売会「ママ・マルシェ」を初開催したところ、開店と同時に長蛇の列ができて、仕入れた300個のパンがわずか20分ほどで完売、買い物支援の必要性を確信しました。５月からは坂の下の地域でも「ママ・マルシェ」を開催し、買い物した荷物を自宅まで届ける配達サービスを開始しました。10月からは訪問型サービスBの助成金を受けて買い物代行や掃除、話し相手などの活動も開始しました。

石村　第２ステップは、おもいやり隊が「ヨコハマ市民まち普請事業（以下、まち普請）」に応募した経緯と、NPO法人格を取得した経緯についてお話します。

津ノ井　中村地域ケアプラザの勉強会でまち普請を知り、応募して500万円の助成金を受けました。この助成金で空き家を改修して地域の方の居場所となる拠点づくりが現実のものとなりました。まち普請のコンテストに臨む準備として、地域住民のニーズを知るために約500人、アンケートを行いました。結果、子どもの遊び場、居場所、喫茶、ランチなどのニーズがあることが分かりました。

石村　2018年度、南区では「地域の居場所づくりモデル事業コーディネーター派遣制度」が新設されました。この制度は南区内で居場所づくりに関する活動をしている団体等に、ニーズに応じたコーディネーターを派遣する制度です。中村地区からは空き家を活用した多世代交流拠点づくりを目指している「おもいやり隊」を推薦することとしました。

津ノ井　その結果、私たちは認定NPO法人市民セク

ターよこはまにコーディネーターとして支援していただき、NPO法人格の取得を目指すことにしました。将来的に活動の幅を広げていくこと、継続していくことを考えると、任意団体ではなく、法人格を取得したほうが良いと考えたからです。半年間市民セクターよこはまに伴走してもらい、2019年３月に設立総会を開催、５月にNPO法人おもいやりカンパニーが誕生しました。まち普請の２次コンテストの準備とNPO法人設立に向けた準備を並行して行っていたため、今までに経験したことのない忙しさでしたが、仲間との絆がより一層深まり、とても有意義な経験となりました。

石村　第３ステップは、多世代交流拠点「おもいやりハウス」開設に向けた資金調達としてクラウドファンディングにチャレンジした経緯と、空き家の改修工事から拠点完成までの経緯についてお話しします。

津ノ井　まち普請の２次コンテストを通過後、拠点整備に着工しました。当初、整備費用を約800万円と試算していましたが、耐震補強費、増減築工事費が予測よりも高くなり約960万円になることが分かりました。まち普請の助成金が500万円、近隣の地域住民に約60万円の寄付をいただきました。また、各種助成金を申請して約220万円の助成金を受けることができましたが、180万円足りません。そこでクラウドファンディングに挑戦することにしました。2019年４月末、「子育てママ達の挑戦！中村町にみんなで支え合う拠点づくり！」と題して目標金額180万円、期間60日間でチャレンジした結果、117名から総額189万5,000円の支援をいただくことができました。

改修工事では、庭木の剪定（せんてい）やペンキ塗りなど、子どもたちも手伝って、できるだけ自分たちの手で行い、念願の活動拠点が完成しました。拠点の名称は、近隣の小・中学生から募集しました。「クレープ３か月無料」というご褒美を付けたところ、約100人の子どもたちから応募があり、「おもいやりハウス」という名前が決まりました。

石村　最後の第４ステップは、今後の課題と目標についてお話しします。

津ノ井　おもいやりハウスは平日の月曜から金曜日、10時から17時までオープンしています。近所の料理自慢のおばあちゃんたちが毎日のように手伝いに来てくれて、ランチを提供したり、総菜の販売をしています。

現在、おもいやりハウスではお菓子づくりや編み物など、通所型サービスBのプログラムを提供していますが、この活動を軌道に乗せることが課題です。また、地域のママさんたちの働く場所として最低賃金以上の報酬が払えるようにすることが大きな目標です。人員が増えれば土曜日もおもいやりハウスをオープンしたいと考えています。クリアしなければならないハードルはたくさんありますが、常に目標を大きくもっています。何より大切なことは、この活動を継続することだと思っています。

石村　ケアプラザは高齢者の施設というイメージが強いと思いますが、子ども向けの企画も行っており、今後は、おもいやりカンパニーと協力して取り組んでいきたいと考えています。お互いの得意を活かして中村地区に新しいインフォーマルサービスを構築していくことが課題であり、目標です。

コメント comment

子育てサークルの活動が買い物支援をするおもいやり隊につながって、介護保険の事業を行い、勉強会を通じて知ったヨコハマ市民まち普請事業のコンテストで助成金を受け、さらにNPO法人をつくって拠点を整備するためのクラウドファンディングでインターネット上での寄付を募り、募った寄付で拠点を自分たちで改修し、オープンし、そして現在その拠点を活用しながら活動を行っているという取組でした。この取組のすごいところは、行政や専門家ではなく、住民がつくったというところです。住民の力の大きさを改めて感じました。この町を良くしたいという熱意や思いは、同じ地域に住む人だからこそ持つことができるものなのでしょう。思いを持つことこそが住民の大きな強みになるということを感じました。　（平野）

トークセッション

平野　今回のテーマである、さまざまな主体とつながるメリットを教えてください。

阿部　名瀬地区の買い物支援は、名瀬地区の地域福祉保健計画の中で地域の皆さんといろいろな団体が相談しながら進めてきたので、区役所、区社協、ケアプラザ、地道に活動しているボランティア、地域の民間事業者など、さまざまな人が一つの目標に向かって話し合っていくことで、これまでなかった関わりが持てると同時に、お互いに英知を共有していくことができたと思います。特に、戸塚区の地域福祉保健計画の支援チームは、土木事務所など福祉とはまったく分野が違う人も入ってつながりをもつことができて良かったと思います。

新井　名瀬地区ハートプランは、いろいろな分野の人が参加して進んでいます。行政だけでも７つの部署が入っています。感謝しています。

大泊　スペース谷津坂だけではなくて、私たちは地域ぐるみの子育てを長年実践しています。そのためには、公的な委員や自治会等とつながらなくてはやっていけません。

私たちは第３期地域福祉保健計画の中に子どもの健全育成部門をつくっています。実行委員として、町内会の代表、民生委員の代表、社協の子育て支援の代表、それからスペース谷津坂の代表・副代表というメンバーで子どもの問題を検討しています。地域が全体でつながらなければやっていけない問題だと思っていますので、点から面になることに努めています。地域の中でサロンや趣味の団体など、いろいろな高齢者の団体があります。そこからも力を得ようと、つなげる活動をしています。それが、地区社協副会長としての私の役目だと思って心がけています。

津ノ井　私は、最初はケアプラザに遊びに行っているだけでした。でも、こんなことをしたいという思いを伝えたことで、今日ここに立つというつながりができました。まち普請事業につながるような市役所や区役所の人など普段の生活ではつながらないところとつながることによって、思いが伝わってこの事業にまで発展したと思います。

平野　ありがとうございました。いろいろな主体とつながるということは一つの団体では思いつかなかったことが活動につながったり、あるいは活動を担う人の幅が広がったり、多くの人たちに訴えることができるということです。問題を共有し、共有したものを点だけではなく面のように広げていくから、課題を解決できるのだというお話でした。

多くの団体がつながることは問題を共有でき、みんなで考える場面ができ、そしていろいろなアイデアとともに生まれる解決の方向が活動につながっていくということなのだと思います。

では、つながった団体同士の関係性について、皆さんが心がけていることをお聞かせください。

石村　私はケアプラザのコーディネーターという立場ですが、今回は主体性を持ったそれぞれの団体がお互いの得意をどんどん活かしていくことができたと思います。おもいやり隊という最初は子育てサークルから始まったママさんたちの団体が、まさか２年後にNPO法人になるとは思っていなかったのですが、これもいろいろな人がそれぞれの得意とすることを活かした結果なのだと思います。

大泊　スペース谷津坂の活動に関しては、全員対等だと思っていますし、つながりは短時間でできるものではありません。私も含めて高齢者は地域の中で生活者として、いろいろな人とつながりを持っています。今度は、そのつながりをぜひ大橋さんのような次の若い世代につなげてもらいたいです。

大橋　私には人脈がないので、大泊さんのような顔の広い人を頼りにして、つないでいただきました。私は、そのつながりを引き継いでいくという役割分担でやっています。大泊さんのような方を見つけるとすごく安心して活動ができるのでお勧めです。

新井　名瀬も皆さんの考えと近いと思いますが、おおむね対等な気持ちでやっているつもりでいます。ただ、同じ名瀬町でも地区によって非常に大きな特徴、差があります。それぞれの地区をよく知った人

が先頭に立たないと、活動を進めていくことができません。

地域福祉保健計画の一環でやっていますが、やはり行政の協力をいただいたり、ケアプラザにもお手伝いをお願いしなければいけない。社会福祉協議会もそうです。そういった意味で共同でやるという意味での対等であって、先頭に立つ人は必要だと思います。

平野　ありがとうございます。対等な関係というと、つい船頭が多くなって収拾がつかなくなるというイメージがあり、個人的に心配していたのですが、今のお話で団体ごとに役割があるのだと思いました。たとえば、顔が広いという役割を生かす、新しい風を吹き込む、場を提供する、お金を助成するなど、多様な主体がそれぞれの役割をもってつながっているのだと思います。

続いて、発表時間には確認できなかった各団体の皆さんの取組をうかがいたいと思います。

まず、名瀬の皆さんにお伺いします。移動支援検討部会の効果、意義、あるいは課題などをお話しいただけますか。

阿部　地域の買い物支援をするにあたってどんな高齢者を対象に開催するかを考えたとき、民生委員、地域のボランティア、ケアプラザ、それぞれが持っている情報が少しずつ違っていました。しかし、気がつくと地域を緩やかにみんなで見守っている状況があって、「あそこの坂の家の人は買い物が大変そうだよね」と見守りができてきているところがすごくいいところだと思います。

新井　課題を考えるといろいろあります。利用者が増えていく場合もあれば、運悪く減っていく場合もあるでしょう。増えるのはありがたいことですが、車両の関係などいろいろな課題が出てきます。もちろん担い手の問題も同様に出てきます。いずれ私も利用者になる可能性がありますので、今はできる限りのことをやって、支援されるときにはしていただくという意味もあっての課題かなと思っています。

平野　会場から「今後お買い物ツアーの回数を増やしていく予定はあるのですか」という質問が出ています。いかがですか？

新井　参加者が増えて、車も増えて、何もかもがうまくできた状態で増やせるといいのですが、なかなかそこまで及びません。ただ、その方向で頑張りたいと思っています。大きな課題だと思います。

平野　ありがとうございます。スペース谷津坂では、連合町内会に説明をし、運営委員会に諮り、実行委員会をつくりと、とても丁寧にやっておられます。立ち上げるときの思いを聞かせてください。

大泊　私は主任児童委員の第１期生で、長年子ども達が自由に過ごせる児童館のような場所をつくりたいという夢がありました。何の経験もありませんでしたが、人脈を利用しながら一つひとつ丁寧に経過をたどりながらやってきました。会場確保が大変でしたが、連合会長、谷津坂会館の５町会の運営委員から、「最初の１回は無料にしましょう」と言っていただいたり、いろいろな協力を得て、少しずつ実現に向かいました。

ボランティアは、公的な委員やほかでつながっているスタッフに参加してもらえることになっていました。応募してくれる人はいないだろうと思いながら回覧を回したところ、２名の強力なメンバーが入ってくれました。学童とか放課後キッズクラブとかではなく、ボランティアの見守りということを理解してもらうように努めました。子どもを見守る場所ですので、地域の方々の理解と見守りの目をいただかなくてはいけないので、過程、経緯説明は丁寧に進めました。

平野　本当に丁寧に進められたということがわかりました。地域で説明会を開いたり、学校にチラシを掲示したり、町内会館と交渉したり、学校長との懇談の機会を確保したりということで、地元の地域とか学校との関係を大切にしながら、進んできたことが十分伝わってきました。

もう１点、あくまで子どもがメインなのか、それともボランティアが主導で活動をやっているのか、子どもとボランティアの関わりを教えてください。

大橋　始めるときに、子どもを集めるためには何か企画が必要ではないかとあれこれ考えたのですが、実際はほとんどの子どもは自分の好きなように勝手に遊ぶのが一番良くて、特別に企画は要らなかった

という経験がスペース谷津坂の一番の学びでした。つまり、スペース谷津坂というのは、何も企画されず、制約もほとんどなく、好き勝手なことをして自由に遊ぶことができる居場所であるというのが最大のコンセプトなのだと思いますし、子どもはこういう場所を求めているのかなと今は思っていています。

子どももスタッフも、最初は名前で呼ばず「ぼくー」とか「ちょっとー」とか「おばちゃんはね」などと言っていたのですが、よくないなと思って、スタッフもちゃんと「スペース谷津坂の見守りスタッフ」と平仮名で大きく書いた名札を付けていますし、子どもたちにも名前を聞いて、名札をつくって壁に付けています。そうすると「○○ちゃんも来た」とか「□□ちゃんもいるんだ」という感じですごく喜んでいて、お互いにとてもよい関係になった気がします。

平野　ありがとうございます。あくまでも子どもを主体にしながら活動しているというお話でした。

おもいやりハウスの皆さんに伺います。母親の役割と活動を継続する役割、この役割を両立させていく上での工夫を教えてください。

津ノ井　私は今４人の子育てをしています。子どもが多いのでなかなか働きに行けないとサークルのママさんたちと話していたのですが、そうであれば地域の中で自分たちの働く場をつくればいいのではないかという思いがこのような活動につながりました。家のことをしながら活動を続けるのは大変ですが、見守りながら仕事ができる拠点ができました。

反面、ボランティアスタッフが足りません。みんなが無理なく働けることが活動を継続することになると思っていて、それが自分たちの課題です。

平野　ありがとうございます。母親であり、一地域住民であり、一社会を構成する構成員として、地元に根付いているからこそ、このような活動が両立できるのでしょう。

会場から「収支は大丈夫ですか？」とありましたが、率直なところをお願いします。

津ノ井　今のところ何とか大丈夫です。わずかばかりですがスタッフにも報酬の支払いもできて、何とか黒字に持っていっています。ランチに来る人を増やし、小箱ショップをもっと地域の人に知ってもらって、安定した収入にしたいと頑張っています。

平野　ありがとうございました。

それでは、最後に発表された皆さんから感想をお聞きしたいと思います。

新井　皆さんがこれだけ興味を持ってくださること自体、大変心強く思っています。

大橋　スペース谷津坂は、最初はたくさんの子どもに来てもらいたいという思いが先行していたのですが、何年かやってみて、子どもは来ても来なくてもよい。毎回来ていた子が、成長すると友だちと遊びに行くほうが楽しくてスペースに来なくなったりします。それでいい、成長したんだなと思えるようになりました。いろいろな子が次々とスペース谷津坂を通過していって、自由に遊んで、たくさん褒められた記憶がその子たちの糧となればいいなと、そんなふうに今は思っています。

津ノ井　ここ何カ月かこういった形で話をさせていただくことが多いのですが、最終的にはいつも団体の継続を心配してくださる声を聞いています。ぜひ、遊びに来て見ていただいて、ファンになってください。

平野　第２分科会のテーマは、さまざまな主体のつながりです。さまざまな主体がつながるということは、一つの団体では思いつかなかった活動ができたり、活動を担う人の幅が広がったり、あるいは多くの人たちに訴えかけたり、ほかの課題の解決に向けての取組もできるということが確認できました。

この分科会のテーマの中には「多様な団体の結び付きがまちづくりに新たな風を吹き込みます」とあるように、地域の活動に新たな風を吹き込んで、よりよいまちづくりにしていただければと思います。これでディスカッションを終了いたします。皆さん、どうもありがとうございました。

第５回 よこはま地域福祉フォーラム

～「おたがいさま」の縁づくり～

育まれる縁

開催要綱

私たちのまち横浜では、普段の暮らしを支える様々な活動が育まれてきました。こうした活動を広く共有することで新たな取組につなげ、困りごとを受け止め支えあえる地域をめざしていこうという思いから始まった、「よこはま地域福祉フォーラム」は今年で５回目を迎えます。

身近な地域の中で、支えあい活動は根づき、様々な形で広がりをみせています。
ひとりの困りごとを同じまちの仲間として受け止めて寄り添い支える取組や、病院や企業など福祉に限らない新たな分野とのつながりを活かしたまちづくり、「私たちのまちのために」という想いを重ね合わせて形作られていく活動など、地域ごとの特徴に合わせて発展し続けています。

今回のテーマは「育まれる縁」としました。幾重にも重なり、まちを彩ってきた縁（つながりや支えあい）が、その色と形を変えながら一層力強い活動や新たな活動として芽吹き、育まれていく、そんな姿を思い描いています。
本フォーラムを通じて、身近な地域における取組に私たち一人ひとりがどのように関わり、育んでいけるのか、みなさんと一緒に考えていきます。

日時

令和２年１月30日（木） 10:15～15:30 ※受付 9:45 開始

会場

午前・午後

関内ホール（横浜市中区住吉町4-42-1）

内容

全体会（基調講演）

**「ひとりぼっちにしないまちづくり
～地域で育む、子どもたちに寄り添う～」**

ゆきしげ ただたか
幸重 忠孝 氏 （こどもソーシャルワークセンター 理事長）

分科会

分科会1.2

参加無料

対象

1,000名（要事前申込）

（1） 横浜市に在住･在学･在勤の方
（2） 地区社会福祉協議会など地域福祉活動団体･関係機関
（3） 社会福祉施設職員、地域ケアプラザ職員
（4） 教育関係者
（5） 市･区役所職員、市･区社会福祉協議会職員
（6） （1）～（5）にかかわらず社会福祉に関心のある方

【主催】横浜市社会福祉協議会 ・ 18区社会福祉協議会

【共催】横浜市健康福祉局 ・ 横浜市こども青少年局 ・ 横浜市教育委員会

午前 ： 基調講演

ひとりぼっちにしないまちづくり

会場 関内ホール 大ホール 10:30～12:00
定員 1,000名

～地域で育む、子どもたちに寄り添う～

こどもソーシャルワークセンター　理事長　**幸重（ゆきしげ）　忠孝（ただたか）　氏**

多様な暮らしが広がる一方、雇用形態や生活の不安定さが子どものいる家庭に影を落とし、子どもたちに様々な問題となってふりかかっています。

家庭や学校を中心に過ごし、普段の暮らしが見えづらい子どもたちに、同じ地域住民として、どう向き合い、関わっていく必要があるのでしょうか。

子どもの置かれている現状から、家庭や学校における子どもたちの“現実”をとらえ、子どもたちの支えとして必要なこと、専門職だけではなく地域住民が関わることの大切さ、地域にしかできないことについて、実践を通じたご講演をいただきます。

【講師プロフィール】

児童養護施設職員、大学教員を経て、2012年4月に幸重社会福祉士事務所を設立。
こどもソーシャルワークセンターとして、「まち」や「地域」におけるつながりを大切にしながら、トワイライトステイ、フリースペース、子ども食堂など、様々な子どもの居場所の運営支援、コーディネートに取り組んでいる。
また、滋賀県教育委員会のスクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーとしても活躍。大学で非常勤講師として 児童福祉系科目を教えている。
NHK課題解決ドキュメント「ふるさとグングン！」にグングンサポーターとして出演。

主な著書に『子どもたちとつくる　貧困とひとりぼっちのないまち』『子どもの貧困対策第2ステージ　まちの子どもソーシャルワーク』など。

幸重さんが出会った子どもたちのエピソードを合わせて制作された、仁と智の兄弟を主人公にした物語、ヴィジュアルノベル「貧困を背負って生きる子どもたち　仁の物語／智の物語」をYouTubeで公開中。

午後 ： 分科会

1 身近なまちで育まれる縁
～まちで寄り添い 支える暮らし～

会場 関内ホール 大ホール　13:15～15:30　定員 1,000名

一人ひとりの困りごとを地域で受け止め、寄り添いながら支える取組を積み重ねることで、自分事としての意識が浸透し、地域の支えあいの力が育まれていきます。「暮らしを支える地域づくり」の必要性を考えます。

コーディネーター： 同志社大学 社会学部社会福祉学科 教授　永田 祐 氏

実践報告 ：
- 横浜市南部学校教育事務所スクールソーシャルワーカー・磯子区こども家庭支援課・磯子区社会福祉協議会（磯子区）
- グループ 男の手貸します・中屋敷地域ケアプラザ・瀬谷区高齢・障害支援課・瀬谷区社会福祉協議会（瀬谷区）
- 困りごと引き受け隊・第3地区社会福祉協議会・麦田地域ケアプラザ（中区）

横浜市南部学校教育事務所
スクールソーシャルワーカー
磯子区こども家庭支援課
磯子区社協

こどもたちの困りごとを支える
～地域と専門職がつながる～

学校や区役所が把握している「朝起きれず登校できない」「制服が買えない」といった課題を抱えたこどもたちの存在。それを聞いたスクールソーシャルワーカーから区社協、地域ケアプラザや地域住民へとつながり、地域でのサポートが始まる。専門職の支援と地域での支えあい、それぞれの強みを活かした関わりの大切さについて考える。

グループ 男の手貸します
中屋敷地域ケアプラザ
瀬谷区高齢・障害支援課
瀬谷区社協

困窮世帯を支えた地域の力
～制度の狭間に寄り添う～

床が抜け、ライフラインが止まった家に住み続ける高齢の母親と息子の世帯。ずっと気にかけ見守っていた地域住民の“どうにかしてあげたい”という思いをきっかけに、専門職と地域住民・ボランティアグループそれぞれが自分たちにできることを模索していく。親子の気持ちに寄り添い信頼関係を築きながら、地域での暮らしを支える取組。

困りごと引き受け隊
第3地区社協
麦田地域ケアプラザ

活動が地域の縁を創り出す
～ちょこっとボランティアで拡がる地域のつながり～

高齢化が進む中で「わたしたちのまちのために、できることは何か」住民や支援機関それぞれの思いが重なりはじめた地域。より広く住民同士が支えあえる地域にしていきたいと、ボランティアグループ「困りごと引き受け隊」を立ち上げ、一人ひとりの暮らしに向き合っていく・・・困りごとを支える活動を通じて変化してきた住民のつながりや思いとは。

2 縁でつながるまちづくり
～つながりで芽吹く支えあい～

会場 関内ホール 小ホール　13:15～15:30　定員 250名

住民、福祉・医療機関、教育機関、企業、NPOなど地域にある様々な主体のつながりが、まちづくりに新たな風を吹き込みます。それぞれの強みを活かすポイントを実践事例を通じて共有します。

コーディネーター： 横浜創英大学 こども教育学部 講師　平野 友康 氏

実践報告 ：
- 名瀬地区ハートプラン推進委員会・名瀬地域ケアプラザ・戸塚区社会福祉協議会（戸塚区）
- スペース谷津坂・金沢東部地区社会福祉協議会・金沢区社会福祉協議会（金沢区）
- NPO法人おもいやりカンパニー・中村地域ケアプラザ（南区）

名瀬地区ハートプラン推進委員会
名瀬地域ケアプラザ
戸塚区社協

多様な主体で地域を包む
～名瀬地区買い物移動支援の取組～

「買い物に困っている」という声をキャッチしたケアプラザ。地域住民（自治会町内会・地区社協・民児協等）と様々な機関（社会福祉法人・企業等）をつなぎながら協議・検討を重ね、解決に向けて動いていく。多様な主体のネットワークをつくり、住民だけでは解決できなかった課題に取り組むためのヒントを探る。

スペース谷津坂
金沢東部地区社協
金沢区社協

地域の声から生まれた活動
～人が育ち、地域が支える～

集まれる拠点がない地域で「小・中学生のために放課後の居場所がほしい」という住民の声を受け止めた地区社協。地域活動者養成講座「地域づくり塾かなざわ」への参加を経て、居場所づくりに取り組み「スペース谷津坂」を立ち上げた。ボランティア募集、活動の周知など、取組を通じて人材が育ち、様々な機関や団体が地域の中でつながり続けるための工夫を紐解く。

NPO法人おもいやりカンパニー
中村地域ケアプラザ

地域課題に取り組む
子育てママたちの挑戦！
～安心して暮らせる街づくり～

坂道が多く買い物に困る高齢者が増えている地域で、子育てサークルのママ達が中心となり、買い物代行や家事支援、話し相手等をする「おもいやり隊」を結成。さらに空き家を活用して、子どもから高齢者まで誰もが気軽に集える多世代交流拠点の運営を始めた。新たなつながりを作りながら課題に取り組む手法を探る。

プログラム

時 間	プログラム	内 容 ・ 会 場		
9:45～ 10:15	受 付			
10:15～ 10:30	開 会・ 主催者挨拶			
10:30～ 12:00	全体会	内 容	**基調講演** **「ひとりぼっちにしないまちづくり ～地域で育む、子どもたちに寄り添う～」** こどもソーシャルワークセンター 理事長 幸重（ゆきしげ） 忠孝（ただたか） 氏	
		会 場	会場 関内ホール 大ホール 	
12:00～ 13:15	休憩・移動	※午後の受付は各分科会の会場で行います。「各分科会 会場」に直接お越しください。		
13:15～ 15:30	分科会	内 容	**分科会１** **●身近なまちで育まれる縁** **～まちで寄り添い 支える暮らし～**	**分科会２** **● 縁でつながるまちづくり** **～つながりで芽吹く支えあい～**
		会 場	会場 関内ホール 大ホール	会場 関内ホール 小ホール

※ 午後の分科会は、途中の会場移動は自由ですが、資料や会場定員等の都合上、ご希望をとらせていただきます。
（定員上限により、移動後に入場またはお席のご用意ができない場合があります）

会場のご案内

会場 関内ホール

- JR「関内駅」北口 徒歩６分
- 市営地下鉄「関内駅」9番出口 徒歩３分
- みなとみらい線「馬車道駅」５番出口 徒歩５分

ほか

住所：〒231-0013
神奈川県横浜市中区住吉町4丁目42-1
電話番号：045-662-1221

※公共の交通機関をご利用ください

問合せ　横浜市社会福祉協議会　企画部　企画課　TEL：045－201－2090
E-mail： chiikifukushi-f@yokohamashakyo.jp

参加申込書

第5回よこはま地域福祉フォーラム
～「おたがいさま」の縁づくり～ 育まれる縁（1/30）

しめきり：12月20日（金）　FAX： 045-201-8385

※ いずれかに〇をつけてください。

新規申込　・　内容変更（一部修正）・　参加取り消し	申込日　　月　　日

● 参加者（団体・所属でまとめてお申込みをされる場合は、参加者のうち代表の方をお知らせください）

No	ふりがな 氏 名	参加するものに〇をつけてください （終日参加の場合は午前・午後、両方に〇）			備 考
1		（　　）【午前】全体会			
		（　　）【午後】分科会 →	希望する分科会に〇 1	2	
	所属（団体名等）				
	住所	（〒　　－　　）			
	電話番号				

● 同団体・所属等でまとめてお申込みをされる場合は、下記に氏名等をご記入ください。
記入欄が不足する場合は、本申込書をコピーしてお使いください。

No	ふりがな 氏 名	参加するものに〇をつけてください （終日参加の場合は午前・午後、両方に〇）			備 考
2		（　　）【午前】全体会			
		（　　）【午後】分科会 →	希望する分科会に〇 1	2	
3		（　　）【午前】全体会			
		（　　）【午後】分科会 →	希望する分科会に〇 1	2	
4		（　　）【午前】全体会			
		（　　）【午後】分科会 →	希望する分科会に〇 1	2	

※ 午後の分科会は、途中の会場移動は自由ですが、資料や会場定員等の都合上、ご希望をとらせていただきます。
（定員上限により、移動後に入場またはお席のご用意ができない場合があります）

※ 原則として先着順とし、ご希望の会（全体会・分科会）にご参加いただけない場合のみ事務局よりご連絡致します。

※ 手話通訳、車いす補助等をご希望の場合は、備考欄にご記入ください。保育はございません。ご了承ください。

問合せ　**横浜市社会福祉協議会　企画部　企画課**
TEL：045－201－2090　FAX：045－201－8385
E-mail： chiikifukushi-f@yokohamashakyo.jp

お申込み

- 参加申込書に必要事項をご記入のうえ、FAX・郵送・E-mailなどでお申込みください。
  （E-mailでお申込みをされる場合は、参加申込書に記載されている必要事項を、E-mail の本文に記載してください）

〈横浜市内の地区社協・民児協の皆さま〉

- 地区社会福祉協議会の方は、地区ごとに各区社協にお申込みください
- 民生委員・児童委員の方は、地区ごとに各区民児協事務局にお申込みください

下記のQRコードを読み取り、WEBからお申込みができます

- 本会ホームページからもお申込みができます
  （参加申込書のダウンロードも可能です）
  http://www.yokohamashakyo.jp/chiikifukushi-f/

- 申込みしめきり **令和元年12月20日（金）**

- 天候・災害等でやむをえず中止をする場合は、本会ホームページ上にて1月30日（当日）午前6時にお知らせいたします

- 原則として先着順とし、ご希望の会（全体会・分科会）にご参加いただけない場合のみ事務局よりご連絡します。

主　催	横浜市社会福祉協議会　18区社会福祉協議会
共　催	横浜市健康福祉局　横浜市こども青少年局　横浜市教育委員会
協　力	神奈川県社会福祉協議会　川崎市社会福祉協議会　相模原市社会福祉協議会
（予定）	関東学院大学　神奈川大学　鶴見大学　横浜市立大学
	公益財団法人 横浜YMCA　認定NPO法人 横浜移動サービス協議会
	公益社団法人 神奈川県介護福祉士会　公益社団法人 神奈川県社会福祉士会
	公益財団法人 神奈川新聞厚生文化事業団　公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会
	一般社団法人 神奈川県介護支援専門員協会　横浜市市民活動支援センター
	よこはま一万人子育てフォーラム　（順不同）

※ 文中は敬称略としています

〈個人情報の取扱いについて〉

参加申込書に記載された個人情報は、本フォーラムに係る企画、主催者用参加者名簿の作成・管理等、本フォーラム関連のみの目的で使用するとともに、本会「個人情報保護に関する方針」に基づき、適切に取り扱います。
（個人情報保護に関する方針　→http://www.yokohamashakyo.jp/sisyakyo/kojin-joho.html）

問合せ お申込み

横浜市社会福祉協議会 企画部 企画課
TEL 045－201－2090　FAX 045－201－8385
E-mail　chiikifukushi-f@yokohamashakyo.jp
http://www.yokohamashakyo.jp/
〒231-8482　横浜市中区桜木町1－1　横浜市健康福祉総合センター7階

※「よこはま地域福祉フォーラム」は一部共同募金の配分金で実施しています。
※ 本フォーラムは「小地域福祉活動推進研修」として実施いたします。
※ プログラム中の各表題は仮題のため変更になる場合があります。ご了承ください。

■主催

横浜市社会福祉協議会

鶴見区社会福祉協議会・神奈川区社会福祉協議会・西区社会福祉協議会
中区社会福祉協議会・南区社会福祉協議会・港南区社会福祉協議会
保土ケ谷区社会福祉協議会・旭区社会福祉協議会・磯子区社会福祉協議会
金沢区社会福祉協議会・港北区社会福祉協議会・緑区社会福祉協議会
青葉区社会福祉協議会・都筑区社会福祉協議会・戸塚区社会福祉協議会
栄区社会福祉協議会・泉区社会福祉協議会・瀬谷区社会福祉協議会

■共催

横浜市健康福祉局
横浜市こども青少年局
横浜市教育委員会

■協力（順不同）

社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会・社会福祉法人 川崎市社会福祉協議会・社会福祉法人 相模原市社会福祉協議会
関東学院大学・神奈川大学・鶴見大学・横浜市立大学
公益財団法人　横浜YMCA
公益財団法人　神奈川県介護福祉士会
公益財団法人　神奈川新聞厚生文化事業団
公益財団法人　神奈川県社会福祉士会
公益財団法人　横浜市男女共同参画推進協議会
認定NPO法人　移動サービス協議会
一般社団法人　神奈川県介護支援専門員協会
横浜市市民活動支援センター
よこはま一万人子育てフォーラム

ほら、
よこはま は
あったかい

第5回 よこはま地域福祉フォーラム

～「おたがいさま」の縁づくり～

育まれる縁

〔午前〕全体会（基調講演）

**「ひとりぼっちにしないまちづくり
～地域で育む、子どもたちに寄り添う～」**

講師：幸重　忠孝 氏（こどもソーシャルワークセンター理事長）

児童養護施設職員、大学教員を経て、2012年４月に幸重社会福祉士事務所を設立。こどもソーシャルワークセンター として、「まち」や「地域」におけるつながりを大切にしながら、様々な子どもの居場所の運営支援、コーディネートに取り組んでいる。
NHK課題解決ドキュメント「ふるさとグングン！」にグングンリポーター として出演。

〔午後〕分科会1.2

「おたがいさま」で支えあう地域づくり、「困りごと」を協力して支える取組、社会福祉法人・施設の地域貢献活動など、「地域福祉」をテーマにした分科会を実施予定。

1）身近なまちで育まれる縁
2）縁でつながるまちづくり

参加無料

日時　令和２年 **1月30日（木）** **10:15～15:30**

会場　**関内ホール**
（横浜市中区住吉町４－４２－１）

主　催：横浜市社会福祉協議会・18区社会福祉協議会
共　催：横浜市健康福祉局・横浜市こども青少年局・横浜市教育委員会
申込み：横浜市社会福祉協議会　企画部　企画課
問合せ　TEL　045-201-2090　FAX　045-201-8385

右のQRコードを読み取り、
WEBからお申込みができます